

令和元年 10 月 18 日

第 37 回兜太現代俳句新人賞に関する訂正のお知らせ

本年 7 月 29 日付にて協会より発表致しました首記の賞に関しまして、このほど受賞者の佐孝石画氏から、応募作品中に既発表の句があった為、受賞を辞退したい旨、申し出がありました。

協会として慎重に審議致しました結果、この辞退申し出を受理し、今回は、受賞者なしとさせて頂くことと致しました。

なお、本新人賞の目的は、将来性のある有望な俳句作家を発掘し、応援することにございますので、今回の本賞選考会（7 月 27 日）における討議過程については、記録として協会ホームページに残置致します。

第 37 回兜太現代俳句新人賞選考委員会

特別選考委員：

小林恭二（小説家・俳人）

穂村 弘（歌人）

選考委員：

瀬間陽子

田中亜美（選考委員長）

中内亮玄

松本勇二

宮崎斗士

山本左門

田中：それでは、審査委員長を務めさせていただきます、田中亜美です。第 37 回兜太現代俳句新人賞の選考を開始させていただきます。現代俳句新人賞の選考委員というのは、審査委員の全員が過去の現代俳句新人賞の受賞者であるという特徴があります。そして今回から、これはまったく新しい試みなのですが、短歌の世界から穂村弘先生、小説の世界から小林恭二先生に特別選者としてご参加いただき、初めての選考会になります。これからの現代俳句新人賞の伝統になっていく、大事な選考委員会ですので、皆様どうぞご協力の方、よろしく願いいたします。

まずは最初に皆さんから応募作全体の総評をいただきたいと思います。どちらからいきましょうか……。特別選者の先生は後の方がいいですね。それでは、瀬間委員から総評の方をお願いします。

瀬間：総評といいますか、感想になってしまいうんですけれども。一つの作品で 50 句と、句が多くなったということもありまして、全体的に、いい句があっても、中にどうしても、駄目というか、これはちょっと、という句が

どうしても入ってきてしまう。そういったものをどこまで自分の中でよしとするか、それにこだわってしまうと、全体としては。逆に特色がないのにまとまっているからいいのかという、そういった、自分としての中の基準というものがまだちゃんとなっていないことを改めて突きつけられたような感じがして。一句一句をいい句かどうかとやっていくのはいいんですけど、作品としてこれを推せるのかどうかというところで決めるのがとても難しいと感じました。

田中：ありがとうございます。そういえば、例年の 30 句ではなく、今年から応募作品が 50 句になったことも大きな変更点ですね。宮崎委員、よろしく願いします。

宮崎：はい。従来の 30 句から 50 句応募ということになりまして、やはり 50 句を揃えるということの難しさを感じました。どうしても作品のクオリティにムラができてしまって、そのために生じる不安定感、50 句全体を通して一定の緊張感を持続できた作品は少なかったように思います。あと応募者各々の作家性、俳句作家としてのカラー、トーンが 50 句を通して明確に伝わってこないきらひがありました。やはりこれも 50 句全体の統一感に欠けるということでしょうか。このあたり今後の課題かもしれません。大変だと思いますけどね、50 句を飽きさせずに読ませるとするのはけっこう至難の技だと思います。ただ 68 篇の作品、3400 句を読ませていただきまして、全体を通して言えば、きらりと光る句、心惹かれる句が数多くあったように思います。

田中：ありがとうございます。山本委員、お

願います。

山本：今、宮崎委員も言われたように、30句の時もそうでしたが、なかなか良い句があったかと想えば、その隣にどうしてこんな句をというようなこともあり、残念というか、特に今年は50句になったので、その傾向が顕著だったと想います。俳句としての定型詩のレベルに達してる句をランクを付けてチェックして、その点数の多い順で選びました。でも、はっとするような句も沢山あり、悩みました。

田中：ありがとうございます。中内委員、お願いいたします。

中内：まず第一印象ですが、今回は応募人数が増えたにも関わらず、丁寧で読み応えのある作品が、段違いに多くなったという印象を受けました。皆さんおっしゃる通り50句ある中で、やっぱり全句いい句で揃えるのは難しいと思うんですけども、そのばらつきの中でどこまで取るか……。

68篇中、多分句会に出ていないだろうという応募者が私は8名ほどいらっしゃると思ったんですが、その8名とも全部予選で落ちています。要するに「これは駄目」という作品は、すごく見やすいと言うか判断しやすいんだけど、いい句、すごい句、自分が好きな句に対して、選考委員の意見がどこまで擦り合わさるのか、一致していくのかということが、今日はすごく楽しみでもあるし、課題だなと思って参りました。

田中：ありがとうございます。それでは松本委員、よろしくお願いいたします。

松本：はい、まあ全体的にはまずまずですけ

れど、今書かれているような俳句からぼんと飛びぬけたような俳句はあまりないように思いました。レベルはまあいいんですが、安定を目指したような句が多いというんですかね、50句を揃えようとした安定的な句が多いように思いました。でも丁寧に俳句を書こうとしているところとか、時折新鮮な取り合わせがあったり、発想の展開があったりして、よかったですと思いました。

田中：ありがとうございます。私も全体的に作品の幅が広がって、レベルが上がったと思いました。審査にあたり、穂村先生の短歌入門書『はじめての短歌』（河出文庫）や小林先生の『この俳句がスゴい！』（角川学芸出版）などをあらためて読み直したのですが、参考になりました。穂村先生や小林先生の選を意識して、この賞にチャレンジした人もいると思います。これは後から述べますけれども、俳句なのだけでも、何か短歌的なストロークというか、呼吸で書かれている句とか、素材の選び方やディテールなどがこれまでの俳句の常識とは違う、新しい流れが見えてきたような気がしました。少なくとも、各委員の賛同を得て予選を通過した19篇の中には、そういう新しい句は上がってきていると思います。一方で、山本委員と私は、この賞の選考をつとめて五年目になるのですけれども、この間の審査でずっと悩ましかったのは、一句単位で印象に残った句で選ぶのか、全体の平均値でみるのかという、打率の問題ですね。山本委員のおっしゃっていることと重なりますが、全体的には今ひとつでも、何句かホームランのような凄い句を出す人もいれば、ヒットやバントで出塁していくような、破綻の無い粒ぞろいの句を出す人もいます。どちらを選んでいくのか悩みどころではあります。今回はどうぞ、穂村先生、小林先生に

もご協力いただければと思います。では、穂村先生からお願いします。

穂村：はい、とても魅力的な作品が多くて、読んでいて引き込まれました。いいなと感じるものに○をつけていったんですけど、そうするとたくさんつくものもあって。ただ全体を読んでから、印象に残ったものはどれだろうと思ひ出そうとすると、さっきおっしゃったように必ずしも○の数と一致するわけでもないという。選考の時どうなるのかちょっと分からないんですけど、今日皆さんのお話を聞かせて頂いて考えを詰めていきたいと思っています。

田中：小林先生、お願いいたします。

小林：とても面白かったです。私は初めて出席させていただくので例年のレベルと比べてという意味ではわからないんですが、新しい詠み方、あるいは新しい感性というものが育ってるなと思って、非常に驚きかつ楽しみながら読みました。一人一人の作家の個性が全く違うので総評は難しいですね。オーソドックスな俳句の骨法に従って書いていらっしゃる方もいる一方で、俳句に対して斬新なイメージを持っておられる方や実験的な方法を模索している方もいたところでしょうか。どちらかといえばやはり実験的な試みをなされてる方が多かったでしょうか。これは「金子兜太」の名を冠した新人賞の性格でしょうね。多少の苦言を呈するとすれば、季語の斡旋には少々問題があったような。かなり大胆な季語の斡旋をされる方が多かったのですが、必ずしもそれが効いていないという印象がありました。季語には本義があって、それに則って使うのがまずはオーソドックスなやり方。ただしそこを踏み外したら絶

対にいけないということもない。むしろ踏み外すことで季語を払ってゆくということもある。ただ当然のことながら外しっぱなしということもありうる。だから読み手しては不安を抱きながらも一所懸命に読まねばならない。つまりあらゆる可能性を考えて読むわけです。これは非常に骨が折れることでした。もちろん、そうした努力が報われることも多くありました。季語に関する新鮮な境地がそこにあると思われた句もありました。しかしどうしてもこの季語が斡旋された理由がわからない、という句も多かった。こちらの力不足で読めないのなら仕方がない。ところが作者が答えを用意していないと思われる句もあった。つまり適当に季語を置いて、それでは読み手に投げてしまう。あなた任せの姿勢ですよ。これは読んでいて徒労感がありました。この季語を斡旋したのはこれではなかったからだ、というような作者の確信がほしいんです。その上で読者は共感したり、あるいは共感できないと思ったりしてゆく。ところがそうした読者の努力の上に胡坐をかいた句が続くと、どうしても読者の信頼が失われてゆく。句と馬鹿正直に正対するのが苦痛になってゆきます。もちろん、作者の側にも言い分はあるでしょう。簡単に読める句は、その分軽く見られたりする。あるいは。通俗的なイメージをなぞっただけの句のように思われる。そこを多分恐れて冒険している。よくわかります。このあたりの塩梅ですね。でも読者からすると、この句はすべての可能性を吟味した上で作者が冒険しているのか、あるいはただ無責任に放り出しただけなのかというのは、存外よく見えたりする。後者だと信頼が失われます。一般論としていうなら、作家としての信頼を得るといのは、どの句にも作者の熟考が滲んでいるということを読者に知らしめることだと思ふんで

す。信頼があれば読者は相当難解な句であってもついてくる。今日の選考ではそのあたりも重視していこうと思いますので、よろしくをお願いします。

田中：ありがとうございます。確かに、たくさん読むのは苦勞しますね(笑)。さて、この現代俳句新人賞のこれまでの伝統でもあるのですが、単純に予選の点数だけでそのまま賞を決定するというものではありません。というのも、各委員は予選でこそ20篇選んでいます。当然、その中にも、優劣とあります。か、おのおの審査員が「絶対推したい」と願う思い入れの強い作品と、さほどでもない作品があるからです。この「絶対推したい作品」についての議論も大切にしていきたいと思っています。

さて、皆さんのお手元には予選を通過した19編の作品があると思います。このうち、審査委員6人全員が選んだものを便宜的に第1ゾーンの作品と呼びたいと思います。5人が選んだものは第2ゾーン、4人の選考委員が選んだものが第3ゾーン、3人の選考委員が入れたもの第4ゾーンです。過去には、審査員同士で議論を交わし合い、ここでいう第3ゾーンの的なところから、受賞作を出したこともありました。その時の受賞者は、現在とても活躍されています。ですので、必ずしも予選の点数だけに縛られず、皆さんとの合議の中で、受賞作にふさわしい作品を議論していければと思います。

それでは、まず初めに、「それはともかく寝ます」を取り上げたいと思います。予選で審査委員全員が選出した作品です。全員が推した第一ゾーンの作品はこの一篇ですから、特筆すべき作品だと思います。それでは宮崎委員から推薦の弁をよろしくお願いたします。

宮崎：全体的にアベレージが高い50句だと思います。心惹かれた句は、「春の星ふくらんでから溶けるバター」ですとか、「フラットの多い楽譜や春の風邪」、「蜂の巣やおごそかにはじまる映画」、このあたり感覚的な切れ味、いい味わいがありますね。その半面、意味不明な句もいくつかあるんですよね。例えば「水温む常用漢字ばかりの壁」これちょっとわかんないですよ。あと隣の「タピオカはひみつばかりで大試験」、これも面白い世界なのかなと思いつつもちょっと分かり切れないところがあった。でも全体的に安定感があって、読んでて気持ちいい50句だと思います。

田中：それでは中内委員、お願いします。

中内：詠み口に独自性があるって、軽やかに詠んでいる句が多いなと、そこに惹かれました。一句目の「春の星ふくらんでから溶けるバター」の、「ふくらんでから」という描写も上手だし、そこに「春の星」を取り合わせたのも効いていると思います。「蛇待てば待たされたまま雨になる」も好きで、絵本でも読んでいるような柔らかい感覚。それから一番最後の句「五月闇いつかは水になるあなた」。これかなり甘い詠み口ですけども、「水になるあなた」という表現を、新鮮に感じました。一つの物語を読んでいるような、軽やかな面白みを感じました。ただ、もし句会であつたらちよっと取れない句も、「はつなつのおおまかに数える目盛り」「初桜さけるチーズをさかないで」「説明のできない柄のレース編む」など、かなり多くありました。それからこの作者の癖として、中七下五の句またがりですごく気になったんです。意図して、「うすはりの

グラスうまれつき白魚」のように、ここは句またがりていきたいと狙って詠んだ俳句というのはもちろん僕は悪いとは思ってないし好きなんですけど、少し適当と言うか……。 「焼野原画家がいていなくなるまで」、「さわってもいいような気がする春灯」「ふらこの鎖ときとしてやさしき」「雪解けや二人がけに三人座る」、面白いと言えば面白いんですが、内容も韻律もゆるい。先ほど小林さんがおっしゃったように、読者にぽんと投げてしまっている。こういう「ちょっと変わった感じがいいでしょう」みたいなのが見えてしまったのは残念なところですよ。

田中：実は私が先ほど短歌のストロークを思わせるといったのは、この作品なんです。読後感として、俳句を読んだあとというよりは、短歌を読んだあとの楽しさのようなものがあった。なぜかという、たしかに「や」や「かな」といった、俳句らしい言葉遣いで書かれてる句はそれなりにあるんだけど、俳句として構えて読むと、ちょっと叙述がゆるいんですよね。今、句またがりっていうお話がありましたけれども、なんかゆるゆるとしていて、だけどそこが、どこか新しい感じがするんですよね。「花篝ゆるくつくるパンナコッタ」の句なんか、特にこのゆるさを感じました。そもそも「ゆるくつくる」っていう中七が6文字になっている。でも、このゆるゆるとした韻律で読み下していったとき、夜桜を見るときの焚火の「花篝」と、生クリームのとろとろとした「パンナコッタ」、この二つに共通する柔らかさが、なんか響きあっている感じがする。とはいえ、正直なところ、私はこの句の良さがはじめは分からなかった。花篝とパンナコッタを、スマートフォンで検索して、画像を見て、そこでなるほどと急にこの句の面白さが分かった気がしま

した。面白さが分かるのに、ちょっと時間がかかるのが難点なのかな。あと、この人は、は感覚的な作品もあれば、写生的な作品もあり、実験的にいろんな作風に取り組んでいるところに好感を持ちました。瀬間委員、いかがでしょうか。

瀬間：私も皆さんの意見と似たような感想を持っておりました。でも魅力的だなと思ってもちろん点も入れたわけですし。とてもこの人自身のその何かをわからせる力がある。それは多分いろいろ皆さんがおっしゃった、何か新しいもの、独特なものを持ってらして、この作家自身の底力みたいなものは私はとても感じました。ただ、バラツキという意味では、逆にだからこそ私も×もたくさんつけてしまいました。「それはないだろう」っていうような、「さけるチーズをさかないで」とか「星の形のマヨネーズ」とか、「ゆるいパンナコッタ」はまあいいと思うんですけど、「星の形のマヨネーズ」は、なぜこの50句に入れたんだろうかと、それが本当に謎で。そういった疑問の方が多く残ったというところですよ。以上です。

田中：松本委員、いかがでしょうか

松本：順序的にはちょっと落ちたんですけど、予選で取りました。悪いところから言うと日常的過ぎるのかなと。少し些末、小さいこと書きすぎたかなというのはありましたね。ただ時々、言葉がぽーんと展開させる力があるかなと思ったのは、「ひらがなをほどけば春の鳥になる」とかね。「線路巻きとって転がすように春」とかいう、何とも言えん、この人独自の言葉をころころと転がして展開してくような力があるのかなと。ちょっと平均点では何か、円周率を一言で言ったらとかいう

のあったわねえ、「π」とか、あんなんはちょっとどうかなとは思って。そんなところです。

田中：松本委員としては、「それはともかく寝ます」にはいくつの作品〇付けてます？

松本：かなり数つけてます。

田中：一方で、「それはともかく寝ます」は予選で選んだ作品全体の中で、自分としては絶対推したいもの、まあまあ推したいもの、一応予選に入れといたという思い入れのレベルでいうと、どんな並びになります？

松本：これはね、「まあまあ」レベル（笑）

田中：「まあまあ」レベル（笑）。私は今回の予選作品を推したい順にB+からC-まで細かく分けたのですが、この作品はC+という感じですか。「まあまあ」ですね。それでは山本委員、よろしくお願いします。

山本：皆さんの探り上げた句は、私も印象に残っていて、全体的に揃っているなあと思いました。ただ、なんか、俳句は定型詩なので、定型の緊密度が緩いというか、それは今田中委員が言われた短歌的ということにつながるかなk・・・。

田中：穂村さんの短歌のエッセンスを、俳句でじんわり滲ませているっていう感じが（笑）

山本：俳句として斬新、面白いなと思えるような作品があったので、私はわりと上位に入れました。「春の星ふくらんでから溶けるバター」なんかはすごく、面白いし。そうかといって「星の形のマヨネーズ」とか。どうしてそんなこと書くのかなと思ってしまった

りしましたけれども。だけど、「蜂の巣やおごそかにはじまる映画」はとても良い。ただ、繰り返しますが、定型の緊密度が低いというか、定型の観念と言うのか、定型に言葉載せて作っていくというスタンスが全体的に緩いという感じがする。

松本：切ろうとしてないんだよね。

山本：そう。

田中：あと、タイトルが長いですね。「それはともかく寝ます」って。角川の俳句賞や各種の賞などで予選に残る作品のタイトル一覧を見ても、この長さはそうそうないだろうっていう。

小林先生、先ほどの話に出た定型感ということも含めて、この作品はどうでしょうか？ どんどん言っちゃってください。

小林：私は高評価で、ベスト3に入れてます。もっと言えば2番に入れています。

田中：おお！高評価ですね。

小林：発想も豊かで面白い句が多いと思います。しかも他の句にしても平均は楽々と越えている。読めば必ず何かを返してくれる。実力のある人だなと思いました。ただ先ほど定型感ということばが出ましたが、俳句的な密度という点に関していえば、若干薄いという印象を受けました。これは短歌的だというご意見にもつながるかもしれません。もちろん短歌的で悪いとはいちがいにはいえない。でも現時点においてはやはり不満が残る。俳句は俳句の、短歌は短歌の、固有の密度があると僕は思ってます。それは言葉や意味のつまり具合というのとはちょっと違う。より手触

りに近いものですが、強いていうなら、切れから生まれるものです。もちろんその切れを生かすためにはその前段階として必要な言葉が必要な分、必要な個所に置かれているということがなければならぬのですが。その上で切れを伴う充足感が生まれる。そのあたりまだ進歩の余地があるような気がします。この作品が受賞するというのであれば反対しません。ただ、まだ伸びしろがある、課題があるということは指摘しておきたいと思う。それなりに楽しめる句は多いのですが、心中してもいいというほど強く推そうと思う句がなかった。ただ皆さんがあげられている冒頭の「春の星ふくらんでから溶けるバター」はとても印象的でいい句だなと思いました。あと短歌的ということについても言述べておきたいと思います。この連作についていうなら短歌的というより、より現代的なんだと思います。それをなぜ短歌的と感じるかという、俳句と比べると短歌の方が感覚的により現代なものを取り入れているということがある。殊に若い世代ですね。歌人たちは現代の事象に臆せず取り組んでいる。果敢に新しいものにつきあう姿勢を見ると、反射的に短歌的だなと思う。同じようなことをいうと、例え短歌であっても形の美しさを追究する句を読むと俳句的だと思ったりする。あと短歌は、心に浮かぶ散文的な感想を俳句ほどには忌避しないということもある。だから散文的だ、といっているわけではありませんよ。本作ではそうした散文的な印象に端を発するイメージをよく韻文にまとめていると思います。言葉を換えれば俳句用のイメージを探ってきて俳句を作って一丁あがりではなく、俳句になるかわからないような散文的な感想をなんとか俳句にしようとしている。この果敢な姿勢は買います。これからさらに伸びる人材だと思う所以でもあります。受賞す

るか否かはこのあたりの評価にかかってくるでしょうね。

田中：私自身、短歌の雑誌に俳句時評を書いていた時期があったり、現代俳句協会青年部の会で歌人の皆さんとご一緒したことがあるのですが、確かに短歌の世界の若い人たちの感覚があるというのは、納得です。その若い世代の歌人たちといえば、皆さん、穂村先生の短歌を読んで少なからず影響を受けていると思うのです。そういう意味でも、穂村先生は「それはともかく寝ます」をどう思われるでしょうか。今、みんなが一番聞きたいと思っているご意見だと思うんですが。

穂村：使われている言葉にある傾向があるような気がして、例えば「さけるチーズ」とか、「どちらからでも開けられます」とか、「星の形のマヨネーズ」とか、「寿司が回転するしくみ」とか、「アメニティの少ないホテル」とか、これ全部資本主義のシステムの開発したものたちですよ。逆に言うと昔はなかったものたちで。それをこの、タイトルに象徴的な話し言葉と組み合わせて独自の世界を作っているという印象を持ちました。十分な批評性がそこにあるのかと言うと、ときどき微妙な気もするんですが、だから、特にいいと思った句はどちらかというところら寄りではなくて、「溶けるバター」とか、この「春筍を分け合って」とか。僕は「π」の句も好きですね。「春の雲円周率ひとことでπ」、一言で言わないと「3.141592・・・」ってずっと終わらなくなっちゃうから(笑)、一言でっていうのが入ってるんだと思うんだけど、そういう感覚に惹かれるものがありました。

田中：まあ、俳句ってある意味一言で言うものなんですけどね(笑)。

穂村：ああ。ほんとですね。

田中：不思議ですよ、「ユーフォーのカードばらまく夏はじめ」って、これ昭和なら「UFO」なんでしょうけど、なんか妖しい(笑)「熱帯魚ミスプリントばかり出てくる」の「ミスプリント」とかも。

穂村：季語にそういう言葉をつけるセンスですね。

田中：今までの話を総合すると、「それはともかく寝ます」については、比較的、皆さん好意的に受け止めているということでもよろしいでしょうか。ここで、小林先生先にぜひお聞きしたいのですけれども、この作品が2位だということは、これ以上にぜひ推したい作品というのは、どの作品なのでしょう。

宮崎：委員各々が「これを推したい」という4、5編を挙げていく、というのがいいんじゃない。

田中：今の作品は全員の予選に入ったという事実に敬意を示して、じっくりやりましたが、確かにこのペースのままで、すべての作品を論じていくのは大変だと思います。次の第2ゾーンに行く前に、審査の要でもある「ぜひとも推したい作品」をめいめい挙げていきましょ。第2ゾーン、あるいは第3ゾーンぐらいまでに該当する作品で、皆さんが、「これだけは絶対推したい」という作品は、ありますでしょうか。例年ですと、予選の中でも1位、2位、3位という順番を伺っていたのですが…。

小林：トップがA-で、2位がB+です。先ほ

どの「それはともかく寝ます」はB+なので私の中では2位に位置しています。A-には「独白」を入れました。「それはともかく寝ます」の方が読みやすかったんですが、○がついた句は「独白」の方が多かった。特に好ましいと思われた句を先に挙げさせて頂きますと、「完璧な逃走でありかいつぶり」、「こっそりと石が石生む冬日かな」、「祖父の部屋白梅は疾走していた」、「我という吹き寄せられた桜菫」、「遠雷や水脈の果てとしてのわたくし」、「刃こぼれの瞬間つづく蟬時雨」。この中でもことに秀逸だと思ったのが、「完璧な逃走でありかいつぶり」と「刃こぼれの瞬間続く蟬時雨」でした。この二句に関して言えば、この審査に参加させていただいてよかったと思わせる出来でした。先ほどの「溶けるバター」の句も素晴らしいのですが、このあたりと比べるとちょっとだけ既視感があります。まあ、比べるべきではないのかもしれない。

田中：そうですね。細かい議論はあとにして、今この場で、絶対取り上げて欲しいという作品を、第2ゾーン、第3ゾーン、このへんの中から言っていただくというのが、審査を効率的に進める上で理想的だと思います。では瀬間委員から、これは絶対取り上げて欲しいというのを挙げていただければ。

瀬間：特に順番はないんですけども、最終的に自分が推したいというのは、3人の方に絞りました。それが「それなともかく寝ます」と、「アネモネ」、「逃げれども花」。以上です。

田中：宮崎委員お願いします。

宮崎：はい。一応予選通過19篇をABCでランク付けしまして、Aが3作、Bが7

作あったんですけど、Aの作品3作だけでいいのかな。

田中：はい、そうですね。

宮崎：じゃあ行きます。まず「雑に折る」ですね、それと「七月のうなじ」、あと「似姿」。以上をAランクでチェックさせていただきます。

田中：はい。それでは山本委員、お願いいたします。

山本：三つ？

田中：一応三篇で。

山本：「雑に折る」、「独白」、それから「それはともかく寝ます」。この三つです。

田中：中内委員、お願いします。

中内：全く山本さんと同じです。まず、第1位は「独白」。これはもう圧倒的にこれで決まりだろうと思うぐらいです。ただよーく読んでいくとちょっといけないものも見えてきてしまって、どういう結果になるのか。2番目は「雑に折る」、3番目は、上手いというよりは軽やかさに好感が持てるという意味で、「それはともかく寝ます」で、1、2、3位をつけてまいりました。

田中：松本委員、よろしくをお願いします。

松本：点数が多いのから順位付けてきたんですけど、1位が「雑に折る」で、2位が「日にち薬」になります、3位がね、「赤坂の芸者」、4位が「似姿」、5位が「それはともかく寝ま

す」でしたと。ひとつ入れたいのが、「七月のうなじ」も入れてますけど。

田中：最初の一つが何でしたっけ。

松本：「雑に折る」。

田中：了解です。私は「日にち薬」「似姿」「アネモネ」の順です。「日にち薬」はかなり推したくて、ここに来ました。1位です。「似姿」が2位。3位は、「独白」と大いに迷いましたが、「アネモネ」にします。「蟻」という作品も気になりましたけれども…。穂村先生、お願いします。

穂村：◎を付けたのが一つあります。それから○を付けたのが三つ、一つは「かへり道」。

田中：「かへり道」、はい。

穂村：あと二つあって、「寝巻のままで」と、「日にち薬」。以上です。

田中：「独白」「寝巻のままで」と「日にち薬」ですね。小林先生、いかがでしょうか。

小林：今二つ挙げたと思いますけど、3位も挙げましょうか。

田中：3位もぜひお願いします。

小林：私その他、誰も入ってないんですが、「イネーブル」を3位に押します。前半はちょっと鈍い感じですが、後半怒涛の追い込みがありまして。「独白」。「それはともかく寝ます」、あるいは「イネーブル」、このあたりの受賞なら私は納得できます。

田中：そうすると今、重要なこととしては、委員もそうですけど先生をお招きして今回選考するっていうことで、やっぱりこの「かへり道」と、それから「寝巻のまま」で「イネーブル」については、私たちは見逃していないのかということも含めて、検討していきたいと思います。それでは点数の低いものからになりますが、「かへり道」についていかがでしょう。

穂村：あ、でも、◎が「独白」なので。自分の中ではわりとダントツ……。

田中：ああ、そうですか。それでは、点数の高い「独白」からやっていきますか。今、穂村先生がダントツとおっしゃいましたが、小林先生どうですか、「独白」は。

小林：1位です。

田中：あ、そうでした。大変失礼しました。こうなると、本当に「独白」がダントツになりますね。高得点の「独白」から伺った方が、いいですね

中内：それで決まっちゃうと、後の人のが触れられない。

田中：後の人が……。

小林：でも「独白」はやった方がいいんじゃないかな。

中内：やっちゃいます？

田中：やっちゃいます？やりましょうか。やっぱりこれだけの注目を集めているのですから、時間を割いて議論しないと。

宮崎：特別選者がお二人とも1位だからね。

田中：じゃあ「独白」を皆さん、お手元に準備お願いします。今度はこれまでとは逆に、特別選者の先生方の意見を先に訊いてみたいと思います。穂村先生、これがダントツだっていう理由を教えてくださいませんか。

穂村：最初に「つみびとの破顔のように」という表現が出てきて、ずいぶん強引な、強い比喻で、本当にこれ季語で支えられてるのかなっていうのが、ちょっと僕には判断がつかなかったんですけど。次が「鏡が封印される」という、これもかっこいいんだけど確信がなかった。もしかして、これはいけてんのかなって思ったのは三句目の「新月という決定的なまばたき」で、これは多分、新月は暗いわけだから、人間が一瞬でする瞬きを、月が時間をかけて行うという見立てだと思って、くらくらしました。語彙とイメージには偏りがあって、例えば「封印」に対して後ろの方に「消印」が出てくるとか。「消印のごとく母美し白十字」、でも、惹かれてしまいましたね。いいなと思った句をいくつか言うと、「雪原に嗚咽を捨てに来た鳥」、「深爪のように砂丘のように春目覚め」、「蟻の列この遠浅の海の記憶」、「刃こぼれの瞬間続く蟬時雨」。どれもテンションが掛かった強いイメージで押してくるのですが、それに慣れてしまうことなく最後まですごいなという気持ちで読み切りました。

田中：小林先生、どんな感じでしょうか。

小林：私はトップにしました。テンションが

かかったと今穂村先生がおっしゃったわけですが、一句一句、確かに相当集中して書いている。日常的な書き流しみたいなものが見られない。こうした緊張感はとてものが好ましく感じられました。喚起力の強いイメージをうまく利用して、非日常世界の深いところまで我々を誘ってくれる。その他優れていると思った点を列挙しますと、一番目にイメージの捌き方がうまい。二番目に叙法の特徴をよく理解して書いている。三番目に切字を置く際の集中力がこちらに伝わってくるほど高い。大きな才能を秘めた作家だと思います。ただこれが完成形かという、まだ先があるのではないかとも思います。もっと先、つまり俳句の可能性を最大限引き出しながら書く、といったことができる作家さんなのではないか、とも思うのです。それからいうと今はまだ俳句の技法をうまく利用してはいるけれど、俳句に可能性を拓げるところまではいってないような気がする。ちょっと期待しすぎかもしれませんが。(笑)。以上です。

田中：ほとんどの皆さんが推してるわけですから、選んでない方の意見を先に出すと、議論がしやすくなると思うんですね。私も、これ土壇場になって外しましたけれども、瀬間委員は、最初からこの「独白」を選んでいませんでした。ぜひ、瀬間委員の意見をうかがいたいと思うんですが。

瀬間：最初の時には一応 A、B、C で分けて B でしたので、△だったので 20 句の中には入れませんでした。私にとってはちょっと、詩的過ぎるという形で、何でしょうか、俳句の世界というのは独特で、美しいというか、確立されたものがあるんですけれども、私は、一作者としては、「置いて行かれている感じ」

がすごくしまして、感情移入できないというようなものがある。そういったものが必要かどうかはわからないんですけども。そうですね、小林先生「イメージ」ということをおっしゃいましたけれども、それは私はそこまでちょっと読み取れなかった。以上です。

田中：私もかなりいいなとは思ったんですけども、何せ 10 月生まれのでんびん座なもので、反論をして、バランスを取らないと落ち着きません(笑)。皆さん、ほとんど賛成なさっているということで、ここは思い切って悪口を言いたいと思います。まず、この「独白」というタイトルですね、ダサすぎだと思いました。「独白」ですよ。で、一句目の初めから「つみびと」です。漢字じゃなくて、ひらがなの「つみびと」。ちょっと作者の感情過多って感じです。欄外に「ダサすぎる、程度の副詞多すぎ」とメモしました。もちろん、皆さんのおっしゃる詩的な作品だというのはよくわかります。例えば「新月という決定的なまばたき」、これはすごい句だと思う。それから「橋渡る人も擦り傷時雨かな」という句も非常に感銘致しました。その一方で「こっそりと石が石生む冬日かな」の「こっそりと」という、この程度の副詞が、なんか思わせぶりの感じがしました。それから「まなざし」とか「うらざり」とか、主張のつよい言葉が多くて、ちょっと引いてしまうという感じがしました。「うらざり」の句とか、「尾崎かよ」とってメモしたんですけど。あの「盗んだバイクで走り出す」の尾崎豊さんですけれども(笑)。でも「祖父の部屋白梅が疾走していた」の「疾走」は、いい句だなと思います。「深爪のように砂丘のように春目覚め」、「紫陽花に火のさみしさを見ておりぬ」もいいですね。「火のさみしさを見ておりぬ」という発想自体はありそうだけれども、こ

ここに「紫陽花」を持ってきたのは、詩的な密度があると思いました。ただ、私とかの人称代名詞を、「遠雷や水脈の果てとしてのわたくし」などのように使ってしまうのは、既視感があるなという気がします。「夕映えや瞳はとおいとおい雫」のこの「瞳はとおいとおい」も「2億4千万の瞳かよ」ってちょっとツッコミを入れたくなります。郷ひろみさんの。ツッコミを入れたくなる時点で、ちょっと発想がベタなのかなって思う。ただし、「十薬の青い心臓濡れてあり」は現代詩のようで美しい。詩的な世界というのは、うまく決まるといいけど、思いや感情が深すぎると、引いてしまう読み手もいるんだと思います。それよりは「どくだみに発火装置がありまして」くらいに、ちょっととぼけている感じの句の方が、親しみやすかった。ただ、何ていうんでしょう、好きな作品もいっぱいあるのですが、どうしてもこの世界は、私には既視感があるんです。新しい世界を感じるには、至らなかつた。かなり辛口で、反論を述べました。皆さん、どうぞ反論の反論も含めて、よろしく願いいたします。それでは、松本委員からお願いします。

松本:そうですね、象徴性があるんですよ、俳句に。「新月という決定的な」とか、「完璧な逃走」ですね。ただ、「こっそりと石が石生む」とか「夜の鏡」などの虚構が、虚構を書きながら、それにある程度存在感が、実感がないといかんと思うんですけど、その辺が虚構に寄り切れなかつた部分がありました。でもこれは駄目やろうという句は一句しか付けてないんで。メモでは「力感があります。現代俳句賞としてはええかもわからん」とは書いてはありますけども。(笑)他の人の押しつけた書き方ではないですね。そういうところでした。

田中:それでは、宮崎委員お願いします。

宮崎:先ほどの評価で言うと、これはB+でした。もうちょっとでAだったんですけどね。全体的な印象としては良くも悪くも手堅い作り方っていう感じがしました。だから、◎も×もあんまりなかつたんですよ、そういう意味では。惹かれた句と致しましては、「桐の花とおく冷たい夜の腋」、これ感覚的にずっと入ってきましたね。「乱読の手足が光るあめんぼう」、これもこのあめんぼうの動きみたいなものが、うまい形で感覚的に捉えられていると思いました。ただ今までお話を聞いていて思ったんですけど、やはり何か同じようなトーンの句といたしますか、「うらぎり」の句も真ん中あたりに二つ続いてありますけれど、「まなざし」であるとか、同じようなモチーフでけっこう2句、3句、ダブリ感があるなどは思います。ただ全体読んできて、この瑞々しい詩情といたしますか、そういうのがふわっと伝わってくる感じはとても心地よい作品だと思いました。

田中:ありがとうございます。それでは山本委員、お願いします。

山本:私はこの作品には、なかなか、独自の、詩的な眼差しというのかな、それを定型に乗っける、定型感が出来てるんじゃないかなと思いました。「新月という決定的なまばたき」いうのは抜群の出来だと思いますし。「橋渡る人も擦り傷時雨かな」とか、私はものすごく好きだなあ。自分の詩的感性を言語化して、定型詩にする力があると想う。形而上詩というのか、かなり成功していると想います。その例句としては「紫陽花に火のさみしさを見

ておりぬ」とか「十薬の青い心臓濡れてあり」とか。ちょっと強引なところもありますが、私としては一番に推しました。

田中：ありがとうございます。中内委員、お願いいたします。

中内：最初ですね、68 作品の応募作から 20 句を選ぶ時には、5 番目ぐらいだったんです。一番最初の予選の時には、「ああ上手だなあ」と。どう言うんでしょう、「海程調」っていつでもおかしくないような、難解だけれども、非常に詩的で美しい世界が表現できているな、上手だなと読み流しまして、B +としました。しかし、予選通過の 19 作品をもう一度「この中から新人賞を決めるんだ」と批判的に読み直した時に、これはおかしいとか、こんな句は取れないという句が、極端にこの作品だけ少なかった。落とした句というのは 2 枚目の「遠雷や水脈の果てとしてのわたくし」ですね。兜太現代俳句新人賞なので、おそらく「水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る」という、金子兜太の句のオマージュだろうかと、ちょっと狙いましたところが見えてしまって取れなかった。あとは最後の二句です。「夏蝶の斃れる前に浮きにけり」は、やや嘘くさい気がしました。一番肝心の「独白は夕焼のまなじりにあります」。これはタイトルの句ですが、ちょっと読者に任せすぎだろうという気がして、この 3 句は句会なら取れないなと思ったんです。逆に言うと、その他の句は全て取れる句であるなど。抜群によかったのは皆さんおっしゃっていた「刃こぼれの瞬間続く蝉時雨」ですね。「空を見る眼球という水溜り」、「乱読の手足が光るあめんぼう」、「暗算の表面張力夏の草」も、「夏の草」の季語でよくこれ詠めたなど。なんでしょう、何回読んでも、非常に感心すると言うか。俳句

という形式でどういうことができるのか、どこまで伝えられるのかということに非常に意欲的にしている。例えば「祖父の部屋白梅は疾走していた」、こんなのもあるんですよ。韻律が悪いけれども、そこに疾走感がある。こういう表現も俳句ではできるんだという、俳句形式の強さを、読者に訴えかけるような、そういう力があつたと思います。

田中：ありがとうございます。やはり、いろいろな議論の出てる、それだけ、手ごたえのある作品ということですね。皆さんこれはどうだろうとかどんどん思ったことを発言なさってください。

穂村：どうだろう、発想に型みたいなものはすごくあって、さっきの「空を見る眼球という水溜り」も、最初の方には「寒鼻眼窩に泳ぐ目玉かな」がある。「暗算の表面張力夏の草」と「音読のはにかみのよう雪の朝」もつくりは近いのかな。ある自分の型。僕はそれを作家性だと好意的に読んだんですけども。パターンという見方もできるのかな。

小林：作者はとても面白いところに立っていますが、ここには長く立ち止まれないという気がします。つまり通過点ですね。今はすべて自分の手持ちのカードで書いてますが、もっと先に進めば、否応なく俳句形式の恩寵にすぎるとはさすがにええない場面が増えてゆく。そのときこそ真の勝負が始まるだろうという予感がある。まあ、私がこんな七面倒な言い方をしなくとも、これだけ強力な詩性をお持ちの方ですから、おのずと俳句の最深部に分け入っていくのでしょうか。先が楽しみです。ただ現時点では不満を持つ方がおられるということはおそらくよくわかる（笑）。

田中：(笑) そうですね。

宮崎：だから、あまりテクニカルじゃないっていうか。例えば1 1 句目から「かな」が4句続いているんですよ。この辺あまり意識的に考えないのかなってちょっと思いました。「かな」けっこう多いですね。「かな」けっこう多いですね。

小林：まだあんまり考えてないんだよ(笑)。

宮崎：考えてないかもしれないですね、だから。

小林：新人賞ですもんね。完成している人を選ぼうとしている賞ではないでしょうから。

中内：50句しかないのに同じモチーフで三句続けて詠む、とか平気でやっちゃうところが見られて、これは、みんなに突っ込まれるところじゃないかな。ところで、のびしろ、という話が出ましたが、さっきの「それはともかく寝ます」の方が、私は伸びしろは少ないんじゃないかという気がするんですね。50句一気呵成に詠んで、題に戻るんでしょう？「50句詠んだよ、それはともかく寝ます」と。そこらへんのサゲ方というのも、玄人っぽい。完成度という意味では、ゆるいけどこれで完成している感じがします。けなしているわけではなくて。

田中：そうですね。ただ完成度とか全体の狙いが決まっているということも、ポジティブに評価してあげなくてはいけないと思うのですけれども。私は中内委員のご意見とはちょっと違って「それはともかく寝ます」にも伸びしろがあると思います。

では、「独白」とは別の作品で皆さんが絶対

押したいというものを議論していきますか。それとも、それとも、これはぜひ論じたいというものがあれば。

宮崎：多分「似姿」とか、「雑に折る」とかがだぶってるんですよ。

田中：「似姿」、それから。

宮崎：「雑に折る」。

田中：それでは応募番号順に「雑に折る」からやりますか。では松本委員からお願いします。

松本：一番〇が多かったんですけど。構成する力いうんですかね、俳句をきちんと書こうとしている力が見えましたね。「目高ごと父を観察する日記」とか「烏瓜血を抜くときに浮かぶ顔」、「ポーチへと銀歯を仕舞う雪女郎」ですか、そんな句が面白かったですね。かなり考えて、一所懸命ですね、自分の感覚を信じて書いた作品が多いように思いました。平均してもう確かにいいとは思いますが。スポーツ俳句が時々出てくるんで、どうかなと。「東京都女子五部リーグ風光」とか「町長の変則フォーム夏隣」とか、これが作品としてどうよと言われるかもしれませんが、全体的に良かったと思いました、以上です。

田中：中内委員、いかがでしょうか。

中内：はい。これは2番に選ばせて頂きました。さっきの「独白」に、比べると言葉の緊密度はゆるい気がするんですが、きちんと作りこまれている。「ペリカンの骨たたまれる春隣」、「豆腐屋の施錠の甘き遅日かな」など、題材を自分の中で上手く消化出来ているな

と思いました。だから比喻にしても、読者がすんなりと納得がいくし、うまい言い方、うまい描写で詠まれていると思いました。そのうまさってのは何て言うんだらう、さっきの「独白」みたいにガツンと上手いわけじゃなくて、句会の中でも、「普通にうまいね」というような上手さなんですよね。ただ、その「普通にうまい」中でも、この「雑に折る」の描写というのは、ちょっと真似するのが難しい。「この作者らしさ」があるうまさ、というのでしょうか、そこに惹かれました。「独白」よりも優れているところは素材に多様性がある、滑稽なことを言ってるんだけど少し寂しさもある。「目刺ごと父を観察する日記」「ジャージにはやや濃き化粧どんど焼き」など、他の作品と、また違った魅力があると感じました。あまり好きではなかった句は、「ポーチへと銀歯を仕舞う雪女郎」、汚い、と思ってしまう。「十二月八日再提出の尿」も、深刻な日付をわざわざ提示して、なぜ尿？これをユーモアとは思えないです。「ものの芽や吐瀉物を拭く若き父」若き父がリアルですが、同時に汚いのもリアル。「鯛焼へ抗菌加工済みの印」マズそうです。「八十八夜肩から肉は厚くなり」「明日葉の天麩羅告げぬこと素敵」、この最後の二句、取り合わせに共感できるかどうかは読者次第ですよ、一般性がない。私には急ブレーキがかかる感じがしました。2位ですし、これが新人賞でもおかしくないくらい好きなんですけど、選考会なのでマイナスポイントも上げさせていただきます。

田中：山本委員も推されてましたね。山本委員、いかがですか。

山本：この作品は、非常にまとまっているというか、私としては二番に押したんですけど。かなりチェックが入っている作品です。それ

で、「それはともかく寝ます」と「独白」の、間ぐらいの感じかなと。

一同：ああ。

山本：全体の作品の傾向が、日常的な出来事とか物を実景に即しつつ、情感をもって表現している。例えば、「烏瓜血を抜くときに浮かぶ顔」「十二月八日再提出の尿」とか、「ポーチへと銀歯を仕舞う雪女郎」、この句はとても面白い。「東京都女子五部リーグ風光る」「町長の変則フォーム夏隣」など、こういうことを実際に体験されているのか、分りませんが、このような日常に起こる平凡なことを俳句に巧く変換している。ただ可能性としては、「独白」の方が詩的純度が高い分、伸びしろがある気がします。

田中：宮崎委員もこれ一番に押されてるんですけどっけ？

宮崎：いや、トップ3の中でこれ2位です。

田中：そうですか。では、この辺でぜひ、小林先生、穂村先生の意見とか、ちょっと聞いてみます。穂村先生、こういう作品はどうでしょうか？

穂村：すごく柔軟で、面白いですね。次に何が来るのか予測できないという。「かいくぐる向日葵のゾーンディフェンス」とか、昔の背の高いひまわりなんでしょうね。それに行く手を阻まれる。「黒南風や国歌を和訳するサイト」、これ僕誤読しちゃったかな、最初見たときこれは、「君が代」を和訳してるんだって思ったんだけど、そうじゃないかな、外国のことですかね。

田中：黒が余計な勘繰りを生むんでしょかね。確かにフランス国歌を和訳するサイトとかもあります。

穂村：勝手にこれは、君が代はもうみんなわかなくて、それを和訳してるアイロニーかと、ちょっと誤読かもしれない。あと、気になったのはさっきの「十二月八日再提出の尿」は、開戦の日ですよ。 「再提出の尿」で支えられてるのかなあって。事実性の重みみたいなものを、ここで批評しているんだと思うけど、これでうまく支えきっているのかどうかちょっと疑問かな。あと好きな句は、「豆腐屋の施錠の甘き遅日かな」とか、「ものの芽や吐瀉物を拭く若き父」とか。タイトルも何か面白いですね、雑に「折る」ですよ、「折る」じゃないんだ。

田中：「クリームソーダ B5 用紙を雑に折る」が表題句ですね。小林先生いかがでしょうか。

小林：楽しませていただきました。けっこうな数印もつけたと思います。先ほどおっしゃってましたが、題材の豊富さがいい。つまり詩人としての目がいい。そしてそれを手堅くまとめるだけのストイシズムも持っている。もちろんセンスも良い。楽しいと思った句は、「ペリカンの骨たたまれる春隣」、「目高ごと父を観察する日記」、「解像度不足の裸婦と二日月」、「ふるさとの牡蠣小振りなる雑煮椀」、「猿曳の猿に足蹴にされてをり」。みんな手堅くまとまっていて好ましく思いました。ただ、ここから先はキナ臭い話になりますが、新人賞に限らず勝負に行く場合、こうしたストイックな手堅さは必ずしも得とはならない。やはり強烈に印象づける句が必要になってくる。いわゆる人口に膾炙する句がですね。大振りでもいいと思うんです。この連作の目

玉はこれだという風なもの。こうした句がないと賞レースは辛いですよ。その点から言えば、佳句は多いと思いましたが、後を引く感じの句が少ない。ほっこりしてはいるんですけど。なかなか五七五全部覚えられない。覚えられないままみんな「ああ、あの句ね」っていいあっている。(笑)。五七五の最初の一文字から最後の一文字まで覚えさせるというのは、これは別種の気迫というかカリスマがいるわけで。そうしたものを得ていかねばなりません。そうすればもっと大きな存在になると思いました。

田中：そうですね、小野あらた君という二十代の若手が俳人協会にいらるのですが、彼に限らず、最近の若い作家には、「え、こんなこと、俳句で詠むの？」というニッチな世界観を追求する人たちが一定数いて、それはそれで面白いです。注目しています。この作者も、研鑽を重ねると、大物になりそうですね。瀬間委員、いかがですか？

瀬間：私も予選 20 句の中には入れてるんですけども。どんどん読んできたときに、好きな句としては「ペリカンの骨たたまれる春隣」ですとか、「目高ごと父を観察する日記」など、〇を付けた句も多かったんですけども、俳句としての面白さというより、この人のネタ帳を見てるような感覚がしてしまっ。例えば「唐突に掴めるコツ」、「町長の変則フォーム」、「父の日の割引券をくれる父」、「これは刺さない虫なのよ」、「母と長女にあるルール」とか、「国歌を和訳するサイト」とか。俳句として季語があって、別のものがあるって、それが俳句としての面白味というより、その人のネタなんじゃないかって。「悔しがる資格」とか、「手の甲にパスワード」とか。それって、そういうことでの面白さ。あと「ジ

ヤージにはやや濃き化粧」、「注射針太き昭和」、そういう目で見ってしまうと、私としてはちょっと、マイナス面がとても目についてしまって、最終的には取りませんでした。

田中：最後に宮崎委員、お願いします。

宮崎：はい2番目に推させていただきます。半径数メートルの日常と言いますか、世界感の切り取り方、出し方が非常に巧いと思いました。生活の中の何気ない部分をうまく詩に昇華してるんじゃないかと思いましたね。好きな句ですと、皆さんがおっしゃっている「ペリカンの骨たたまれる春隣」、「春隣」の使い方が、ああ、こういう風に行くんだって、大変刺激的でした。あとやはり「目高ごと父を観察する日記」、シビアに見えてけっこう滋味のある関係性みたいなものが伝わってくる感じがしますね。「得点差凄まじ秋の飛行船」、これ一方的にやられるときのあのぼわーとした感覚がね、巧く「秋の飛行船」というフレーズで出てるんじゃないかと思いません。あと一番好きだったのが「注射針太き昭和や寒の水」、昭和という時代を「注射針太き」というフレーズで、うまく言えたなあ、捉えたなあ。これかなり感心しました。その半面×も多いんですけどね。「ビスコ食む二百十日の工場長」とか、あと「猿曳の猿に足蹴にされてをり」とかね。あと最後の「明日葉の天麩羅告げぬこと素敵」とか、このあたり少し遊びすぎというか勇み足というか。標題句もね、「クリームソーダB5用紙を雑に折る」ちょっとポップにしてアピールしたいというのがあったのかも知れないんですけど、どうなのかなと。そういう感じはありました。ただ全体的に見るとこの作者にどんどん興味

が湧いてくるといいますか、新人賞に相応しいようなパワーと快活さを感じました。

田中：皆さんそれなりに、まあ納得はしている候補の一つですね。それ以外で、絶対にこれ推したいと思われる句はいかがでしょうか。では続きは休憩の後ということで。

(休憩)

田中：では再開してよろしいですか。今小林先生の1位と2位は取り上げて議論しました。続いて、瀬間委員の1位は何でしたっけ。

瀬間：順位は付けてないんですけども、「アネモネ」と「逃げれども花」、最終的に推したいなと思いました。

田中：私は「日にち葉」を1番で押しました。今ざっと選が重なっているもので、「似姿」が三人、宮崎、松本、田中。どこから行きますか。

宮崎：「似姿」私のトップです。

田中：「似姿」がトップですね。「日にち葉」は私が1位。じゃあ「似姿」から始めますか。「似姿」は、宮崎委員に1位にした思いの丈を、よろしく願いいたします。

宮崎：はい、基本〇が一番多かったです。もう半分ぐらい〇付けちゃったんですね。シャープな感覚と、詩情を感じました。あと、家族詠もけっこう多いんですけど、その家族との関係がね、かなり如実に、クリアに伝わってくるなという印象があります。例えば、好きな句ですと、「手鏡にふくらむ午後を鶴帰る」、この「鶴帰る」の

使われ方、詩的だなと思いますね。あと「ニセアカシアおやすみと云ふ母は他人」、この「お休みと云ふ母は他人」という措辞も、すごく微妙な関係性みたいなものが伝わってきて凄いな……と思ったんですよね。「ゆふやけや老画家の半身は湖」とか、まさに老画家の佇まいがふわりと伝わってくるような、見事な捉え方だと思います。全体のバランスとしても上々で、この作者の方かなり効果的な言葉の使い方を知っていると、何回も唸らされた作品です。

田中：お願いアピールですね(笑)。瀬間委員は、3句の中には選んでませんが、この作品を予選で選ばれてますよね。いかがでしょうか。

瀬間：私も3位には入らなかったですがいいと思いました。最後まで〇はついてました。〇がついた句がいっぱいあったんですけども、ちょっとそれだけというか。特徴があまり、ガツンとくるものがないというか……。

田中：私が「似姿」を2位に推した理由を言います。まずこの「似姿」をいいなと思ったのは、「つま先に種火のごとく仏の座」とか、「硝子戸を開きアスパラガスと海」。「アスパラガス」にこのガラス扉の透明感がいいかなと思いました。それから、「ニセアカシアおやすみと云ふ母は他人」。ちょっと軽いんですけども「似姿」のような柔らかく暖かくのんびりした感じの読後感っていうのは、応募作全体を読んだ中では、あんまりなかったです。あと、けっこうお子さんのこと言ってるんですけども、今までの吾子俳句と違って「母は他人」といつてみたり、「麦の秋子どもは灰を知りたがる」とか、これまでの愛情べったりの吾子俳句じゃなくて、ちょっと親子

関係を俯瞰して捉えてるところが、新しいかなと思いました。「メタ親子」っていう感じが、まさにタイトルの「似姿」と通じていると思う。「人参の花ゆっくり拾ふ接続詞」という句も個人的には好きでした。たぶん、接続詞というのは、文脈が順接か逆説かということなんだと思うけど、相手の言葉を根気よく待っている情景という感じもする。まだ、お話するのがうまくない、小さなお子さんの言葉を待っている親の実感なのかもしれない。小林先生はこういう作品は、どうでしょう。

小林：いいんじゃないでしょうか。とても面白かったです。今回読ませていただいた中でも屈指の句だと思った二句がありました。

「ゆうやけや老画家の半身は海」、「雨粒を背に天牛のゆがみかな」、好きでしたね。俳句としての筋の良さともいいまいしょうか。全体としても悪くないですよ。僕の評価はBでした。これは同率4位ということです。ただ上位に食い込めなかった理由をいうと、ちょっときつくなるかもしれませんが、やはり句の煮詰め方甘い。それも随所で出てくる。なぜこの言葉がここに入るのかわからないというケースが多い。なんとなく雰囲気で置いただけでは、ないかと勘繰りたくなる措辞が結構ある。そうした創り方を是とされる方も多いとは思いますが、私はやはりすべての言葉に必然性が欲しい。ことにそれが出たのは季語の斡旋です。総じて恣意的だと感じました。きつい言い方ですいません。ただ、そこはまだまだ学べるところでもあります。季語の斡旋は難しい。あまり突き詰めるとついてきちゃう。でも奇を衒うべきではない。熟慮した上で選べば、たとえベストでなくともその気迫は伝わる。当たり外れはあります。勝敗は兵家の常、失敗は成功の元。でも熟慮がなければ次も同じ失敗を重ねるでしょう。攻めて

みましようよ。その上での失敗はいいじゃないですか。しかし残念ながらそこまで踏み込んでの失敗作というのがあまり見られなかった。ただ感覚の良さは讃えられていい。観察が存外深いところまで及んでいる。そんな句が多くありました。今回の応募作の中でも印象に残る作品群でした。憎まれ口をたたきましたけれども、これは高く評価するが故のものだと理解していただければ助かるのですが。

田中：もちろんです。ここはこうした方がいいという具体的なアドバイスがあることの方が作者の励みになると思います。穂村先生、どうですかね。

穂村：とても好きな句があって、皆さんおっしゃっていた、「ニセアカシアおやすみと云ふ母は他人」。「ニセアカシア」の「ニセ」が付いてようにも見えるけど、でも意外と効いてる。あと「おやすみ」がいいですよ。もう一つあげると、「素麺の父はかがやかしき影と」ですね。これうまく散文的に翻訳できなかったし、言いさしみたいな文体で。でもなんかこの言いさしが光ってるような。

田中：ありがとうございます。次に「日にち葉」に移りましょうか。これ私と松本さんと瀬間さんが推していて。松本委員これ何位ですか？

松本：2位です。

田中：瀬間さんは。

瀬間：私は推してないです。

宮崎：「逃げれども花」の方だよ。穂村先生が

◎付けていらっしゃる。

田中：失礼しました。では、これは穂村先生、ぜひお願いします。

穂村：三句目の「原作に登場しない冬林檎」、ちょっと物語かもしれないけど、「白鳥は研究室に匿われ」とか、「ワゴン車の定員満たし潮干狩」、「ワイシャツに胸板のある薄暑かな」、あと最後から二句目です。境界に別の茸の出できたる」。自在感がとても面白くて。◎を付けた三つの作品のうちの一つです。ただ例えば「叡山が終点のバス柳絮とぶ」は、「とうるん」ってこれでいいのかなっていうような感じもします。あと、ちょっと踏み込みが弱いような。

田中：私は1位に推しています。B+です。「日にち葉」の特徴は、作者の主観が無い訳ではないけれども、薄いというか、淡い感じがするところですね。もう少し主観性を濃くすると、「独白」の人みたいに引き立ったんだろうなと思うのですが、この水彩画のような淡い感じが、何ともいえない余情や余韻を感じます。今、穂村先生がおっしゃった「原作に登場しない冬林檎」とか、白雪姫のリンゴなんか思い出しちゃったりして。それから「初売りのペットショップの犬の舌」。きちんとした写生の句であり、「初売」の季語が効いてると思います。ただ「叡山がとうるんと」っていうのは確かに無理がありますね。欄外に「とうるんとは、擬態語？」とメモをしたのですが、ちょっと推敲が甘いかなと思いました。「ワイシャツに胸板のある薄暑かな」、当たり前だけど「かな」が効いてる。「箱庭に湖の匂いのして来たる」も心情の淡い陰翳が感じられていい。ただ、淡いんですよ。「大粒にはじまる驟雨楸郵忌」なんていうドラマ

チックな作品がもう少しあると、いいのかな。もっと言うと最初の「木枯らしは微かに錆の匂いで」っていうのを、「錆の匂いを嗅いでおり」くらいに自分を主語にして押し出して出してくれた方が、50句全体のバランスから見ると引き立ったかもしれません。この人、引いちゃうんですよ、人がいいっていうか、静かに呟いているというか。「独白」の人とは、ベクトルが逆なんだと思います。「新酒酌む隣の人の左利き」は、左利きの人と飲んでいるとカウンターなんかで肘がちょっととぶつかる。こういうのって、何かいいなって思うのだけれども。松本委員、いかがでしょうか。

松本：これは、淡々と書いてるんですよ。一句一句冷静に書いている。そして巧みに句を作ってますね。生活の中の、日常の中の、ちょっとした気づきみたいなものを、ふっと掬い上げて一句に仕上げる力があるのかなと。「つばくらめ試し書きする紙の裏」とか、「夏風邪やうっすら葉紐のあと」、などなどですけどね。それと、感覚も時折冴えとるけど、それを出さないと言うかな。「やったるで一感」がないんですよ。(笑)「やったるで一感」がないんだけど、でもすごく、冷静に俳句を書いとる、日常を掬い上げる力があるかなと思いました。以上です。

田中：この踏み込みみたいなことに関して、小林先生、「日にち葉」についてどう思われますか？

小林：最初はいいと思ったんです。でも何回か読み返すうちに、季語の斡旋に不満を感じるようになった。内容に対して合った季語を入れる。これは基本です。ぜんぜん悪くない。しかしそれだけでいいかというところ

わけでもない。季語を使うことで、その季語の領域を広げる、ということもある。それは難しいことですけどね。季語というのは歴史上、優れた句によってその領域を拡大してきた。俳人にはある意味そうした義務もあると思うんです。新人賞の選考会で述べるべきことではないかもしれない。それは多くを望み過ぎていてるかもしれない。でも俳句に関わり、ある程度表立っていく人は、季語の領域を少しでも広げていく、あるいはそうした仕事があることを提示していく義務があると思うんです。この作者の場合ですね、一読しては山ほど印がついた。読んだ時よっぽど楽しかったんですよ。候補作を読むというのは実は大変な仕事です。最終選考から参加した私ですら19×50句読まねばならない。正直いって苦しい瞬間もある。その点、「日にち葉」はすいすいと入ってきた。俳句のことをよく知っている作者だと思った。自分の発想を読者に無理なく届ける力がある。ただそれだけに才能のある俳人が背負わねばならない義務も背負っている。やはり俳句の領域を拓ける独自性を有する強い句が欲しい。今皆さんの話に出手きた句はみんな好きです。好きですが、○までいかない。△で止まってしまう。例えば「新酒酌む隣の人の左利き」、いい句です。句会で出会ったらなんと楽しい句だだと思うでしょう。ところが読み直してゆくうちに「本当に「新酒」でいいのか？」と思ってしまふんですよ。「新酒」は手堅いけど、それ以上ではない。もう一步の踏み込みがない。もっとギリギリで勝負してみたら、また別の句境も生まれるのではないかと、○には届かなかったけど、好きな句もあったな。、「円卓に冷やし中華の二人前」、こういう句は大好きです。ただこれは個人的に愛玩したい句であって、新人賞の選考で推奨したい句じゃないんだなあ。

田中：そうですね、審査員の立場から見た「勝負どころ」「強い句」を意識するというのも、新人賞を応募する上では参考にしたいところですね。それでは、今度は瀬間委員が推している「逃げれども花」を議論したいと思います。瀬間委員、お願いします。

瀬間：多分これは絶対新人賞は取らないだろうなと思いつつ、でもまあ、私はいいと思ったからということで、今日心に決めてきました。作者っていう人がよくわかるというか、独特な視線をしっかりとっていて、しかも私は一読者として見た時に、それにすごく共感することができました。そういう意味で、俳句、50句を読むのが私はすごく楽しいなと思いました。ちょっとシュールなところも含めて、表現を一生懸命しようとしている。もちろんすごく完成されてるとかそういうんじゃないんですけれども、私はこの作者をすごく応援したいし、そういう気持ちになりました。

田中：例えばどういう句が魅力的ですか？

瀬間：例えばなんですけど、「心臓を隠す名札や初桜」とか。「牛だつたものを背負ひて入学児」、あとは、「躑躅燃ゆ男の腹にない臓器」、二枚目の「かき氷ではなくなったものを飲む」、何て言うのかな、人と違ったことをしようとしている感じが、あるなと思いました。

田中：私は「逃げれども花」は予選20句で入れていませんが、一枚目の、「光らない螢鳥賊しか見ていない」というのは、不思議な句だなと注目していました。「牛だつたものを背負ひて」って、これランドセルのことですよな。

小林：そうですね。

田中：「かき氷」も好きでした。ただちょっと「菜の花や人であふれる精神科」とかの表現が直接的すぎるかなと思いましたけれども。「花嫁のため筆られし薔薇と羽」だと面白いです。あと「オリオンや故郷で父は老いていく」っていうのは、目新しい発想ではないけれども、いい句だと思いました。自意識に引き付けて詠んだ句が多い中で、大きな景が見える句で、作者の思いも伝わってきます。小林先生、どうでしょうか。

小林：先ほど、瀬間先生がおっしゃられた句は全部チェックがついてて。やはり注目句だとは思いますが。「心臓を隠す名札や初桜」、それから「牛だつたものを背負ひて入学児」、それから「躑躅燃ゆ男の腹にない臓器」、といった句ですね。「かき氷」の句のこともあげてられたかと思いますが。でも先ほどと同じことを言うようですが、「心臓を隠す名札や」の句の季語は「初桜」がいいのか、と考えて込んでしまう。あるいは「牛だつたものを背負ひて」はまあいいとして、入学児はやめてほしい。(笑)それから「躑躅燃ゆ」も、どうかと思う。もう少し、何とかならなかったのかな。素直な感覚だとは思うんだけど。あと、句稿を見て思ったのは、使用している原稿用紙の美しさ、字の真面目さ。そうしたものには強く好感を抱きました。選考とは関係ありませんが。「たましひは肋骨のなか鳥帰る」、「あやめたき者二三ありキャベツ剥く」の二句も、私にとって好ましい句でした。

田中：どうぞ皆さん、何か、ご意見などありましたら。

中内：五人取ってるんですよ。

宮崎：ああ、予選でね。

中内：だから嫌いではないんですが、私が読んでいてちょっとつらかったのは、「死」のモチーフがけっこうあるんですけど、それがどれも・・・。「また母になれず流るる血や五月」とか、子供が流れちゃったのかなあとか、生々しく、痛々しい。「君を焼く煙の隠す夏の富士」とか、死ぬ作品がかなり多い。「葬送のごとく列車は夕焼けへ」とか、「人形の片脚だけがあり雨月」とか、陰鬱ですよ。俳句のモチーフそのものを、もう少し明るいものに変えられた方が、いい方向に進まれるんじゃないかなと思いつつも、予選では取りました。例えば「初めから炎のかたち紅葉散る」とか「心臓を隠す名札や初桜」などですね、こういう作品の方が、素直に、取る方ももっと取れたなあと。もしくは、死を詠むのであればそれこそもっと、先ほど小林さんがおっしゃったような、圧倒的な、気迫のこもった季語とそれに伴う表現が必要じゃないかなと。

小林：本当に辛い思いをなされたんですかね。

中内：そのあたりが・・・、本当に辛い思いをして、俳句で昇華しようとしているのか、それともただ単に、俳句のネタとして「死」を持ってきただけなのか。「峰雲やゴッホの指は引き金に」とか、「姫ぎみの身を投げし池赤まんま」などを読むと、真剣さが分からないんですよ。好きな句もいっぱいあるんだけど、取りにくいなあと思いながら、もったいないなと思いつつも読んでいました。

中内：そのあたりが、本当に辛い思いをして、

俳句で昇華するのか、それともただ単に、俳句のモチーフに持ってきたのかな。この俳句を読んでると分からないんですよ。ちょっとふざけてる感じもするし。そうすると今度ふざけちゃだめだよってという話にもなってくるから、好きな句がいっぱいあるんだけど、取りにくいなあと思いながら、もったいないなと思いつつも読んでました。

田中：時には、あえて写生の句を作ってみるとか、いろんなパターンの俳句を作ってみるといいかもって思います。「オリオン」とかの感じで。穂村先生、こういう句、いかがですか。

穂村：そうですね、「ちりめんを分かっラップの薄さかな」、「ちりめん」が効いてるんですけど。

小林：さすがだなあ。(笑)

田中：さすがだなあと。(笑) これまでの重い議論がさらっと、「ちりめん」に移りましたね。

穂村：ストレートな感じのところはやっぱり長所だと思うから。「オリオンは」とかは、普通なんだけど、いいかなって。

田中：普通なんだけど、さっぽありしてて、気持ちがいいんですよ。

小林：最初読んだ時にハッとしたんだけど、さっと〇がつけられなかったんだよね。やっぱりそういうところ見抜くってところがすごいなと思って。さっと反応できない句ってあるんだよね。

穂村：「逃げれども」って、「逃げても」って

という意味なんですか？

瀬間：「逃げれども花」。

穂村：そんなに繰り返すのか、なにかここに思いがあるのでしょうかね。

宮崎：でも非常に、私性というかな。私この50句、一句も意味不明な句がなかったんですよ。だいたい普通50句には何句か意味不明な句があるんですけど、この作品にはなかったです。というか、やっぱりこの作者の方は、自分自身というか、自分の来し方、そういうものときっちり対峙してこの50句を書いておられるんだろうという、姿勢は伝わりますよね。だからその意味ですごく興味を惹かれました。

山本：私もこれ、4番目に推してる。こういうマイナーな感性いうか、感じを俳句にしている。「躑躅燃ゆ男の腹にない臓器」なんか、すごい句だと思いますけどね。そうかといって、「今はなき星もあるらむ天の川」なんかはもう、言い尽くされてるような発想で。けど一つ一つの句が、非常に、含意がある。「かき氷ではなくなったものを飲む」、これ一番好きなんですけど。これがいいです。全体の作品のトーンを象徴してるような、何とも言えない寂寥感いうか。哀しさいうか。

田中：「逃げれども花」もそうですが、これまでの議論であがったいい句をびっくあっぷして、アンソロジーとか作りたい感じですよな。

松本：「たましひは肋骨のなか鳥帰る」の句は、この全部の中でも相当上に行く句だと僕は思ってます。この作者は、この50句を感覚

が昂揚した時とそうでない時に書いてるんだと思うんです、この50句を。ですから最初の、半分ぐらいはすごくいい精神状態いうか、感が極まるとる時に書いてきた。「心臓を隠す名札や初桜」とか。途中から生活になって、自虐的になって、ちょっと理屈書いたり。ずっと同じ意識レベルで書いていたらもっと粒がそろったのでないかと思います。

一同：(笑)

田中：「ちりめん」の句あたりから、作者の世界観が分かたれてる感じがしますね。

松本：この句、面白くなってきたから、帰ってから研究しようと思いますけど。

小林：こういうの選ぶのがすごいよね。だんだん「ちりめん」いい句に見えてくる。

田中：「ちりめん」、どうしてこの句の良さに気づかなかったか。(笑)

小林：やっぱりこういう句を選べるのは、ある種の運動神経なんだよ。

田中：「ちりめん」一つで、こんなに盛り上がる(笑)。

小林：「作った奴より選んだ奴が偉い」っていうのは私の口癖なんですけど、これは作った人も偉いけど、選んだ人は更に偉い。

田中：では次、「アネモネ」行きましょうか。「アネモネ」は瀬間さんと私が推したんですけど、瀬間委員、いかがでしょうか。

瀬間：最初はさらっと読んでしまったんです

けれども、何度か読むうちに、だんだん嘔むと味が出てくるような感じがして。ちょっと悔れない感じがしました。「独白」の時はちょっと詩的過ぎるような感想を持ってしまったんですけれども、この方の詩情というのは、私にはほどほどの感じがしました。力がある方なのではないかなあという、感じがしました。

田中：例えばどんな句が印象的でしょうか。

瀬間：○を付けたのは、ざっと言いますと、「意地悪な人の背中にゐる田螺」、「現像のされぬフィルムよ春の鹿」、「少しもてあます二日目の風船」、「初夏の飛び石は十分な硬さ」、「草笛が止んでも傘は乾かない」、「十葉の一つひとつにある地軸」、「かなかなや村に一角獣の墓」、「灯火親しむ限りなき労働者」、「秋あかね飛ぶよ見つからない子午線」、「きちきちばった目に映る仮想敵」、「一月の付箋に貼られてゐる付箋」、「雪降つても無くならない滑り台」、「鷹高くゐて国境を超ゆる水」、この辺りで。全体としてもよくできていると思いました。だからといって、やっぱり、齟齬というか、雑駁なところも目立ちますし。「甘美なる夕焼け」ですとか、その前の「木漏れ日の掬ひきれない」とか、そういうのは、どうなのかなあと。ただ、読めば読むほど、いい感じがしてきちゃって。読み返すたびにどんどん、○に近づいていく。それが何なのか今、うまく、これという論理的なことが言えないんですけれど。

田中：私も「アネモネ」を3位で推しました。現代俳句新人賞に応募してくる作品の傾向として、主張の強い作品とそうでない作品があるのですが、この作品はそうでない作品、淡い作品なのですよ。瀬間委員と私は、性

格的には真逆ですけど、予選で選んだ作品は、かなり重なっている。さきほどの瀬間委員の「ほどほどの詩情」という評は、まさしく言えて妙だと思います。惜しいのは、「アネモネ」の表題句が今ひとつということ。「わがままなアネモネ大き過ぎし花瓶」からタイトルをとったのでは、ちょっともったいないです。○の付いた句は、さきほどのご意見とまったく重なります。「草笛が止んでも傘は乾かない」なんて特にいいですね。また、面白いなと思ったのは「一月の付箋に貼られてゐる付箋」。今回68篇の応募作を読む中で、「付箋」という素材を使った句がけっこう多くありました。もう少し言うと、「付箋」と「ジュースー」という素材がよく詠まれていました。本のメッセージそのものより、それが張られている付箋。果物そのものよりは、ジュースーで砕かれてゆく果物。そうしたものに妙なリアルを感じているというのかな。直接的というより、間接的な感じで世界をとらえている気がしました。「アネモネ」の世界もそうで、世界を少し遠くから見ているような柔らかさがある。「真鍮の杵より青葡萄あふれ」なんか、いい映像を切り取っているなと思います。「灯火親しむ限りなき労働者」。声高なメッセージでないところがいいですね。「刈萱の三十三と三分の一の鬱」、これはかなり謎な句ではあるのですが、この作者は33歳と1/3歳なのかなとか、色々な事考えたりして、何かいいなあとと思います。穂村先生いかがですか。

穂村：そうですね、「少しもてあます二日目の風船」って、このリズムって多分わざとなんですよね。「二日目の風船少しもてあます」だと、リズムは別に持て余し感ないから、わざとともたつくようにしてるのかな、そういう感じも面白いし。「一月の付箋」の句も、なんか

印象に残りますね。

田中：飯田龍太さんの「一月の川一月の谷の中」っていう有名な句があるんですねが。

穂村：はい。あと最後の「枯芝に裁判員の椅子を置く」も、背後になにか寓意みたいなものがある句なのかなあ、僕が知らないだけなのかなあと思って。なんとなく、単に取り合わせたんじゃないっていう雰囲気が。タイトルの句がちょっと惜しいですね。

田中：来年から、応募の際は、ぜひタイトル考えましょうみたいな。

中内：タイトルは大事だと思いますけどね。

穂村：タイトルの句って、タイトルの句だって絶対思って読むし話すもんね。

田中：そうすると「それはともかく寝ます」なんて、うまいですね。逆から言えば。

中内：どうかなあ。(笑)

穂村：そういうのばかりだときつくなりませけどね。(笑) それが一個だけだからね。

田中：これはタイトルが「草笛」になったら、全体の印象がかわったかなと思う。全体の雰囲気も「草笛」の方が近い。

中内：タイトルでちょっと盛り上がれそうじゃないですか、これ。(笑) これダメだろうっていうの、いっぱいありましたよね。

宮崎：いっぱいあったよ。

中内：もったいないと思ったのいっぱいありましたよね、タイトルで。

宮崎：あったあった。

中内：「寝巻のまま」とか、よくこんな軽いタイトルにしましたよね。(笑) 「いつからか刃こぼれのあり夕桜」とか、骨太のいい句があるのに。

田中：「七月のうなじ」とか、よりによって、なぜこのタイトルで勝負するのかなと思いました。(笑)

穂村：「赤坂の」はわざとですよ。

中内：「赤坂の芸者」(笑)

松本：僕3位「赤坂の芸者」にしたんですけどね、「赤坂」だけでどうかなと思ったんですね。

中内：ああ、なるほど、そうですね。

宮崎：ああ、そうですね。

中内：芸者まで書かなくても(笑)。「レシートにくるむ小銭や春寒し」「住職が鶯餅と煙草買ふ」など、渋くて好きです。

松本：句はいいのがいっぱいあったんやけど。題でみんな嫌がるんやろなど。

田中：山本委員が1位に推したのは、「独白」でしたっけ。

山本：はい。

田中:そうすると、皆さんの「ぜひ推したい」というか1位の句はひととおりの議論できたと思います。ここでぜひ聞きたいのは、「イネーブル」を小林先生が推されていることです。「イネーブル」をやってみたいなど。

小林:「イネーブル」の前にですね、先ほど穂村さんが挙げた「枯芝に裁判員の椅子を置く」、かなりの句だと思いました。この中では断然光ってる。わたしも好きでした。それで「イネーブル」ですが、最初B評価だったんですけども、後でB+に上がった。読んでるうちに魅力が増してくるんです。最初に目についた句としては、「ダリの象だらだと卯の花腐し」があります。大変キャッチーな句です。この句を入りにして後から「背骨なき蠍の暑さハイヒール」なんか効いてくる。暑さの形容として秀逸です。このあたりから「十葉や深夜バイトの深呼吸」、「最適なる言葉キーンとかき氷」、「蚯蚓鳴く SF 雑誌縛りゐて」、「ピーマンのジャンボ機づらを洗ひけり」、「ニュートンのリンゴや起上るバイク」あたりが続々視界に入ってくる。あと△ではありますが、「旅に住む友より冬の星動画」、「火の粉にも引力及ぶ吉書揚」、それから「冬萌や一瞬なれば信じやすく」。何句か、初めて見る構えの句だなと思うものがありました。と同時に、地味だけど手堅い句が見えてくる。「杉菜にも杉菜のことは知り難し」、オーソドックスな句材ですけど、うまく仕上げている。総合的な力量がありますね。「誘蛾灯待合せなきピラ配り」もいい。古風な感じですけども、既視感はない。詠み方に幅のある人で、ひょっとするとかなりベテランなのかもしれません。手堅い句、即効性のある句、後から効いてくる句のバランスが良かった。あと季語の斡旋が面白い、独特です。ただちょっとしんどい句風であるのも事実で、

始めに読んだとき実は嫌だった。よくもこんな考えさせやがってと思って。ところが2回目を読むと、一回め読んだものが蓄積されたのか、少し楽に入ってくる。三回目はもっといい。ただ、他の委員の支持を受けていないことを考えれば、もうちょっと一読印象明快な句を増やした方が良かったのかな。

田中:たしかに、最終的な上位3句の中には入らなかったですが、予選では、四人が選んでいます。山本委員、松本委員、宮崎委員、私です。あまり、選をひっくり返すのもどうかと思い、自重してるんですけども、今のように説明されると、支持したくなります。この句の良さをどう説明すればいいんでしょうか。今の若者って、分からないことは、すぐにスマートフォンで検索するじゃないですか。私もそうですけど。そういう検索ということ的前提にして句を読んでいくと、わかる、しかも、一見、飛躍しているようにみえて、感覚も通っている。アレゴリーですよ。直接的に感覚するメタファーというより、一定の知識や情報を前提として共有した上で楽しめる世界。

松本:季語のずらし方って僕は書いてるけど、ずらし方がうまいかなと思うんですよ。あとコンビニの生活者。コンビニのバイトか、社長さんかアルバイトかわからんけど、コンビニに生活の根がある人なんかという風なことが、ところどころありましたけど。「ピーマンのジャンボ機づらを洗ひけり」とか、「おにぎりの前後取替ふ夜半の雪」とか、面白いなあと。季語をうまくずらしとるなあと、季語をずらすというか、言いたいことから季語をずらして付ける。上手なんかやけくそなんかよくわからん、まあずれとるなど、ありきたりな季語じゃないなど。

田中：それはやはり季語を承知してるからでしょうか。

松本：でしょうね。季語をよく承知しとるのかなあと思いますね。

田中：「旅に住む友より冬の星動画」っていう句も印象的でした。現代の「旅に住む」って感じが、「冬の星動画」でよく出ている感じがする。「アザーンのラグ短しよ鱗雲」は最初、イスラムの人たちの礼拝だから、季語の内容としては同じでも、言葉としては「鱗雲」より「鰯雲」の方がエキゾチックでドラマチックなのかなと思ったんです。でも、こうした風景は私たちにとってインターネットやテレビで馴染みのものになっているんですよ。だから「鱗雲」の方が言葉としてさりげなくて、いいなと思いました。細かいところかもしれませんが、こういところ、巧いです。

宮崎：この作品も詩的感覚の妙というか、ある意味でのパワーは感じるんです。私がいただいたのは、「ピーマンのジャンボ機づらを洗ひけり」、これ確かに、ピーマンのあの形とか、独特のインパクトがあって、それをジャンボ機に喩えたのは面白いと思いました。ただ、「優曇華やゴムのやうなるコップ水」かな、「ゴムのやうなる」がわかりません。

田中：それは、わからない。

宮崎：ね。伝えたいんだろうけど。当たりはずれというか、それがけっこう激しい感じでしたよね。

松本：ゴムの味がするようなコップ水かと。

宮崎：え、ゴムの味？ですかねえ、いや、でもこれだとわかんないかも知れない。あと「メロン損」って意味わかります？

田中：今のは「熱を出すことは今時メロン損」の句についてですね。

宮崎：「メロン損」なの？

中内：メロンもらえないんだよ、昔はメロンもらえたけど今はもらえない。

宮崎：今はもらえない、そういうの「メロン損」っていうの？（笑） そうなのか（笑） わかんなかった。

松本：これは意味わからなかった。「メロン損」で、株式用語でもあるのかな。

田中：株式用語。（笑）

中内：ないでしょう（笑）。熱を出すけど、メロンもらえないんだから。¥、ちょっと損な感じ。

宮崎：あとこれも、「白南風や自動ドア洗へる手動」もわかんなかった。どういう感じですか、「洗へる手動」。

田中：自動ドアを手動で洗ってる。

宮崎：ああ、え？

山本：自動ドアは手がかからない、けどそれを洗うのは人だと。

宮崎：そういうことですかね。ただやっぱり

表現が強引なのかも知れない。

中内：強引、強引ですよ。 (笑)

田中：盛り上がってますね。(笑) なんかちょっとバラつき感がある。

宮崎：バラついている。

田中：では、次行きましょう。時間も迫ってきたので、皆さん他に推したい、取り上げたいというものを、時間の限り、いきましょう。最後はどうしましょうか。とにかく議論で挙がったもののなかで、全会一致で選べるのが、一番理想的なんだとは思いますが。

中内：とりあえず予選選考委員の6人のうち5人が取ってる作品は、やったのでいい。あと「コカ・コーラ」と「赤坂の芸者」だけがまだ取り上げられてなくて、そこまでは全員で批評した方が作者もうれしいかと。

田中：はい、じゃあ「コカ・コーラ」から行きましょうか。中内委員、お願いします。

中内：はい。これを読んで、題材を探す視点に、この作者独特のものがあって面白いなど。新しい句材、新しい発見を探している作者に対して、非常に好ましいなあと、頑張ってるなあと感じて楽しく読みました。例えば、「陽炎える大看板のコカ・コーラ」なんかは、コカ・コーラの看板があるだけなんですけど、非常に暑さが伝わってくる。暑いな、なるほどと、面白い夏を発見したなと思うんです。「草むらにやわらかい巣作りの音」も好きな句ですね。「うんていにぶらさがる夏無伴奏」「愛こそはすべて連結部の蛇腹」とか、無伴奏や電車の蛇腹なんか、面白いな、と感心し

ます。しかし、頑張って発見しているもののなかで、どうでもいい発見をしている句もあるんですね。だから、発見の良し悪しが、イコール俳句の良し悪しに直結している。例えば、「ビニールの椿ホテルイエスタデイ」とかね、ビニール看板ですか？何か面白いこと発見したと作者は思っているんでしょうが、読者にはわからないし、どうでもいい発見をしてきたなと思ってしまう。「進むときここを叩くのと酷暑」、肝心な「ここ」を読者に任せてしまっている。「ペルソナの手を引かれゆく夜店かな」単なるお面ですよ。「はつなつの天文台と闇を恋う」は、同列に並べた「天文台」と「闇」が響き合わず、ゆるい。空振りも多い作品でした。

田中：山本委員、ぜひいいところをお願いします。

山本：「囀りや足元に横たわるもの」とか、「日雷洗濯機覗き込んでいる」、「カウンター皆空蟬となりぶけり」、「手花火の夜を円くして亡ぶ」、「跨線橋時雨の軌道知っている」、好きな句が沢山ありました。ただ、今、中内さんが言われたように、新しいもの発見して、それを俳句にしていく。そのスタンスは感じられますが、その発見に斑がある。もっと感覚を前面に出して勝負したらいいと想う。

田中：好きですよ、「愛こそはすべて連結部が蛇腹」とか。「愛こそは」と大きく振りかぶって、最後が「蛇腹」あたり、すごいなって。「連結部が蛇腹」って、よくぞ詠んだって感じで。(笑)

山本：こういう句は私も好きなんですけども・・・俳句としていいかなあ？自分で選んで、なんか考えちゃう。

田中：「貝櫓ガラス張りのエレベーター」も蜃気楼でなく「貝櫓」で味が出てくる。ただ「エレベータ」でいいんでしょうか。

宮崎：「エレベータ」で止まっていますね。この作品、刺激的な50句ではあるんですけどね。好きだった句は「パンプスの半分脱げて黒揚羽」、「うんていにぶらさがる夏無伴奏」、これ無伴奏という言葉がかなり効いてるんじゃないかと思いました。あとは「カウンター皆空蟬となりにけり」、これも場の空気感がよく伝わってくると思いましたね。ただ全体としては、刺激的ではあるんだけど、納得するまでは行かない。まだ若干不安定さが気になるって感じですかね。でも、かなり惹かれた一編です。

田中：熱がないわけじゃないんですけど。穂村先生どうでしょう。

穂村：読み上げられると、自分が見過ごしたのを、すごく、あれ、いいんだなと思うけど。この一連は特に今そう感じました。「囀り」とか、目で見てる時は入ってこなかったんだけど。

山本：「囀りや」がすごくいい。こんな句が沢山あれば……。様々な想像を喚起する句。

田中：この「や」が効いてる感じ。「囀り」という具体物があって、足元に横たわるものは something なんですよ。小林先生、いかがですか、絶対聞きたい。

小林：どうしても？（笑）

田中：すごい訊きたいんです。（笑）

小林：わからなかったです。もうちょっとこれからかなあ。やっぱり、うーん、これからかな？しいて言え、薄氷の余命たっぷり誕生日」は好きでした。だからこの人の感覚が面白いんでしょうね。いいと思います。あと、俳句は形というものがあって、壊すにも形が必要なので、全体に言ってやっぱり、まだまだ形の勉強なされるとももっとも、これだけの特殊な感覚のある方ですから、よくなるんじゃないですかね。こっち入ってない感じが強いですよ、だからずらずら読まされるっていう感じで。内容は面白いので、ここまで上がってきたというのは、素晴らしいセンスをお持ちの方なんだろうけれども。「後生畏るべし」という感じで。（笑）

田中：俳句の形といえば、「ビニールの椿ホテルイエスタデイ」という句が気になりました。どうしてもこの内容が読み取れない。たとえば、「椿」とか「ホテル」のあとに、助詞の「の」が入るだけで、もうちょっとわかるのに。

穂村：「の」？

田中：「の」ではないかもしれませんが……。なんか、助詞とかこまかいところをもう少しきちんとしてほしい感じがします。

松本：この人はもしかしたら、物を提示して、何かを象徴的に語ろうとしようとしてるんじゃないんと思ったんですけど。一生懸命、理屈は書かんようにしてるけど、報告はなくしてしもうとるんで、そこは惜しいんですけど。物事を書いて、意味づけなしで、皆さん思えよ、みたいな書きっぷりでしたね。ちょっと、面白いんか、手練れなんか、これから

の人なんか、よくわからなかったです。チェックした句はまあまああったんですけど、報告的な句が多いのが残念やったですね。「空色になりかけている屋根の石」なんかも報告なんかなあと思うし。ところが「まくなぎや明るい出口までふたり」と言われたら、普通のこと書いとるけど、何かそこにあるのかなと思う句もあったです。

田中：次に、なかなかキャッチーなタイトル、の「赤坂の芸者」にいきたいと思います。

松本：俺が3位に出した。(笑)

田中：推薦の弁、お願いします。

松本：題名がちょっともったいないなと思ったですね。題名の句の報告だったですね。「赤坂の春雨傘の芸者かな」は報告の句ですけど、「ちぎるほどうららかなになるメロンパン」とか、上等な豆腐に聴かす初音かな、「コンビニの広き田舎へ夏休み」とか、なかなか、ひらめいているって言うんですかね、発想が豊かな人かなと思って。題名で皆さん引かれたかもしれんですけど。しかも、安心して読める句が多かったのが新人賞にいいかどうかわかりませんが、破綻をきたしているような句はあまりなかったということです。以上です。

田中：「赤坂の芸者」に象徴されるきつい句よりも、「住職が鶯餅と煙草買ふ」とか、「鳥曇ずつと休みの骨董屋」とか、さっぱりとした江戸前の感じの句に惹かれました。「コンビニの広き田舎へ夏休み」っていうのも、素直な感じで好きでした。でも、小林先生に「この俳句がスゴい！」と言ってもらえそうな句かというと…(笑)。

小林：いいと思った句があります。日常吟って実は難しいんです。「日常がよく詠めている」っていうのはよく聞く言葉ですけど、実際それが、本当に批評として機能しているか疑問を感じることも多い。でもこの句はまっとうな意味でいい日常吟だと思います。

「レシートにくるむ小銭や春寒し」、「冬支度ときどき猫をどかしつつ」、スナップショットがよく決まっている。かなり手練れの方でしょ。こういうのって意外と見ないんですよ。いや、風景としては誰もが経験してるんだけど、うまく俳句に落とし込むことができない。運もあるんですけど、やはり相当な技量が必要です。印はかなり付けました。しかしタイトルの「赤坂の芸者」は問題ですね。タイトルというのは全体を統括するイメージなんですけど、これが効いていない、というか逆効果になって足を引っ張っている。もっと作風に合ったタイトルがあったはずですよ。それどころか、秀逸なタイトルを付ければ大化けした可能性すらあります。でもそれはたられればですね。タイトルの無策は作品選択の無策にも繋がっている。それぞれの句自体には光るものがあるけれども、通して読むと雑駁な寄せ集めみたいに読めてしまう。非常に惜しいと思いました。まあ、批評は簡単ですが、50句まとめる難しさ、ハードルの高さを改めて感じさせる作品でした。でも一句一句は読みごたえがありましたよ。

田中：すごく打率が高かったです、この一群は。

松本：タイトルのわりに。

田中：さっぱりしてるんですよ、けっこう。

松本：カツ丼食いに行つてざる蕎麦食うたみたいない感じ。

一同：(笑)

田中：ああ！さすがは愛媛県現代俳句協会会長！ハズキルーペかけて、松本委員、うまいこと言いますね。(笑)

松本：題名を「ニコウキスゲ」ぐらいにしてくれたら。(笑)

田中：この方の作品には、さっきのような助詞がないから分からないっていうのがない。「ニコウキスゲ」や「鳥曇」ぐらいだったら、けっこうみんな取るんじゃないかなと(笑)。

そろそろまとめの時間となりましたが、皆さん、いかがいたしましょうか。

宮崎：ちょっとだけいい？ 最後一つだけ残ってるのがあるのよ。二人取つて、「七月のうなじ」。これもやっとなか？ これだけ残すのちょっと忍びないかなと。

田中：そうですね。では「七月のうなじ」お願いします。宮崎委員お願いします。

宮崎：ちょっと不思議な感覚の50句なんですよ、危ういんだけど、不安定なんだけど、その不安定さが一つの妙味になる気がしました。独特のふわふわ感、変な日常感と言いますかね……。 「遅刻して廊下の鹿と見つめ合う」ってこれ、実際に鹿はいないと思うんだけど、なんか遅刻した所在なさみたいなものが、中七下五で伝わってくる気がしました。それとか「背後から両目塞いで蝶生る」って、けっこう面白

いなあと。恋人同士とかこういう所作をやりますけど、あの空気感と、蝶の生まれる感じとの取り合わせが、かなりうまく決まっているように思います。「紙魚だけがカフカの城にたどり着く」も、紙魚とカフカの世界感みたいなものがうまくバシッと、見事に取り合わされていると思いました。全体のトーンというか、ふわふわしたトーンが、いい味わいになって伝わってきたので、心惹かれた50句でした。

田中：松本委員、いかがですか。

松本：はい、まず「題悪し」って書いてますね。(笑)

一同：(笑)

松本：題はちょっと悪いかなあと思いましたけど、非常に作者の勢いを感じたですね。勢いを感じたのと、感覚を優先して書いてとる。少々のは、自分が今思った、感じたものを言葉に、俳句にするところに力が出たのかなあと思いました。「虹になるため食前に飲みなさい」とか、「遅刻して廊下の鹿と見つめ合う」、「なまはげに姉が渡した走り書き」(笑)なんかわからんけど、(笑)なまはげ感が出とる。

小林：これいい句ですよ。

宮崎：面白いですよ。

小林：これが受賞するんだつたら、反対しないつもりで来ました。

一同：おお！

小林：飛びぬけた句が何句かありますね。先ほどの「なまはげ」の句も面白いと思います。素十の「づかづかと来て踊子にささやける」を思わせるところもあります。なまはげなんか出て来るとびっくりするけど、秋田では日常詠なんでしょうね。つまりお姉さんがなまはげを演じてる友達か恋人だかにさりげなくメモを渡したという。あと「白鳥をおぶって帰る四畳半」もいい。实景を思い浮かべるには情報が少ないんですが、まるきりの観念句とは思えない。多分作者の中では元となる風景があるんでしょう。「紙魚だけがカフカの城にたどり着く」。これも实景でしょう。古い本に紙魚が走ったという。でも書き方が知的で面白い。「ごきぶりに〇して次の世に生る」。好きな句ですね。ユーモアの句でしょうが、後を引きます。発想の妙もありますが、裏打ちされている感情がちょっと怖い。同工の作品ですが「いろいろな顔に×つけ髪洗う」もいい。これ多分、美容院かなんかで見本を見ているときのことを詠んだのでしょう。日常の景色だけど表現がユニークなので、どきっとさせられる。ただとてもユニークな分、外れもでかい。(笑)でも◎が一番多く付いたのはこの連作でした。

一同：おー。

小林：この作品は、私非常に好ましいと思ったので。そういう風に議論にはならないでしょうか、なれば、反対はしないつもりです。

田中：「迷惑なメールが欲しいハンモック」とか、笑っちゃいますよね。ハンモックにいるくらい暇な時は、迷惑メールでも読みたいのか。いや、もっとくつろげよとか(笑)

小林：もう一回言いますが、実際にあった風

景だと思います。まあ、捉え方はすごくユニークなんでびっくりしましたが。

松本：つぶやきが俳句になってる感じ。

宮崎：そんな感じですよ。

小林：想像上の句は逆に少ないんじゃないかなあ。「カフカの城」なんかもベースの景色はわかりやすい。

穂村：ちゃんと白鳥も帰って行くんだよね。おぶって帰ったあと、白鳥が。実体はあるんだよ。

松本：白鳥の役をした人か何かで、田舎祭りかなにかで。

小林：基本的に北国のイメージが前面に出ている。

松本：「廊下の鹿」も、本当におるんかもわからん。可能性が。

田中：ちょっともったいないのが、「教室に二重スパイ」とか「担任のブラックリスト」とかでですね。

小林：駄目な句も確かにあります。

田中：「メーデーのあとの人体不思議展」とか、こういうのは、好きなんですけどね。一番目の句の「末っ子に生まれて緑蔭がまばら」っていうのは、末っ子なんだろうなあという実感がある。あと一つ、もったいなかったのが「開けるたび外れる網戸.com」。このドットコムが発想は現代風だけど、坪内揆典さんが先行して句にしている、最近よく見かけるの

で、惜しかった。だけど、その隣の「空蟬が見ている僕のダイジェスト」という発想はちょっと見たことがない。これは面白い。

小林：落差はある。

田中：ダメな句多いけど、面白です。皮肉っぽい句もありますが、不思議に不快にならないです。穂村先生、こういう作品はいかがでしょうか。

穂村：好きですよ、空蟬も好きだし。「叢虫の窠にいろんなスポンサー」。

田中：スポンサー(笑)

穂村：これはアイロニーですよ。あと、「警察のロビーに押収の案山子」も、実景なんだけど言葉の組み合わせ・・・。

松本：実景なのかな・・・。

小林：実景じゃなかったらこんな句作る必要はないですよ。これで観念的な句だったら、何の取り柄があるんだっていう感じの世界ですよ。(笑)

田中：この句については、山本委員、法学の専門家としてのお立場から、どうですか。

山本：いいじゃないですか。

田中：いいですよ。(笑)

山本：小説みたいに、案山子が証拠物件として、何かミステリアスな。

田中：証拠物件としての案山子。(笑)

山本：ただ、証拠物件が一般の人に目撃できるところにある、というのはあり得ないですが・・・。

穂村：警察、ロビー、押収、案山子ですもんねえ。

山本：この人警官の句で、「警官が日傘の影に歩み寄る」がありますねえ。

田中：これも実景なんでしょうね。その一方で「水中花ひらくペーパーカンパニー」とか。

山本：この句はとてもいい。私は好きですが、そして「紙魚だけがカフカの城にたどり着く」、「カフカの城」は、私も俳句に詠みたいなあと思っているのですが、全然詠めない。これは凄くいいなあ。「紙魚」を持ってきたんは・・・。

田中：私はドイツ文学が専門ですけど、カフカの「城」というのは、積んだまま読まない本の代表格だと思います。話もやたらと長いんですよ。たぶん、紙魚だけが、コツコツと読みすすめてるんだと思う。

中内：「虹になるため食前に飲みなさい」とか、食前に飲む薬なんでしょうね。その実感と诗情とのバランスが面白い。ただ、物に即していない句が目立ちました。例えば、「迷惑なメールが欲しいハンモック」。具体的にはハンモックが出てくるんだけど、「迷惑なメールでもいいから欲しい」、それぐらい寂しい時があったという実感に対して、それがその、果たして「ハンモック」と響き合っているかどうか・・・、弱いと思いました。ハンモックがメールを欲しがっているような詠み方

も推敲の余地があるでしょうね。「ストライクゾーンをよぎる藁」や「稲妻になればわかってあげられた」、「秋の蚊に方位磁石の針が向き」など、さっき小林さんがおっしゃった通りで、もしこの 50 句の中に「面白がらせよう」という虚が主体の句が混ざっていると、どれもこれもつまらなくなってしまうという弱点があるのではないかと、そこがちょっと気がかりでした。「どっちかのごぶしに氷結ばれる」「芥子坊主くつ下だけは脱がさない」などもつまらないです。逆に「七月のうなじに当てる鉄定規」っていうのは嘘がなくてすごく好きです。ヒヤっとする感覚が、正しく伝わってくる。なぜタイトルが「七月のうなじ」なんだ？感覚として、この作品 50 句を総括するならば「鉄定規」の方が、よっぽど合ってるんじゃないでしょうか。「七月のうなじ」って色っぽくて、なんか全体のイメージからは離れてしまったような気がして、もったいないなと思いました。

山本：エロティックな感じするなあ。

田中：「鉄定規」という題名にしたら、印象が変わりましたね。

中内：変わってくると思うんです。全部変わってくると思う、少なくとも「七月のうなじ」よりは・・・。

田中：私は題名に騙されて、選び損ねた感じがあります。「なまはげに姉が渡した走り書き」なんて、こんな面白い句をどうして見逃したんだろうと思う。恋文だとしたら「姉さん、そこで渡すなよ」と言いたい。(笑)

中内：逆に「白鳥をおぶって帰る四畳半」っていうのは絶対嘘ですけど、これはアリだと

思うんですよね。なんかわかる気がするんですよ。

田中：いや、嘘じゃないかもしれない。本当におぶって。

中内：やったんですかね。(笑)

松本：そうやったんかもしれん。田舎でねえ、子供が白鳥の役したりすることあるのかなと。

小林：そうですか。

中内：「ぶらんこに立ってまたするその話」とか「いろいろな顔に×つけ髪洗う」など、実感がある句。好きだなと思う句もいっぱいあったんですけど。

田中：いろいろと話しましたが、どうしましょう。そろそろ投票して受賞作を決めましょうか。それとも、合議で決めましょうか。

中内：いやあ、合議でいいんじゃないでしょうか。

田中：合議で、ええ。

宮崎：どうやるの？合議っていうと。今まで 11 作話しましたよね。

田中：11 作出て、今まで議論した中で、11 作の議論の中で、これはというものを。

宮崎：投票じゃなくて？

田中：もし、皆さんの間で意見が割れたら投票という形になると思いますけど。先日行わ

れた現代俳句評論賞が、議論を尽くした結果、全員一致でまとまったって話を聞いたんです。投票した方がいいのでしょうか。

中内：でも8人選考委員がいて、7人取ってる、しかもそのうちの3人が1位取ってる句があるので、逆に、それだけは外したいという強烈なご意見があれば。

田中：そうなんです。いきなり、白紙に戻して投票をするより、これまでの議論の経緯を振り返って、意見を調整した方がいいと思うのです。特別選者の先生お二人が揃って一位に推している作品がありますし。

松本：「独白」でいいんじゃない。

宮崎：そうなるのか。

田中：私は「独白」は予選の20作品の中に選んだものの、最後の3作品の選考では外しました。批判的なこともたくさん申しましたが、皆さんの意見もうかがった上で、受賞には賛成です。

中内：むしろこの人はベテランじゃないかっていう恐れがあつて。

田中：いや、新人賞にベテランが入ったっていいんですよ。とにかく、作品本位で、私たちは議論してきたのですから。瀬間委員、いかがでしょうか、この「独白」が現代俳句新人賞になることについては、どのようにお考えですか。

瀬間：そうですね、私は違う方がいいかなと個人的には思いますけど、ただそれを覆してまでという何か、というものはないので。そ

ういった意味ではいいと思います。合議という意味で。

田中：現代俳句新人賞は37回目ですが、今回、初めての兜太現代俳句新人賞っていうことを考えるとき、やっぱり、この賞が合議で決まるとするのは、俳壇全体に向けても訴求力があると思います。しかも、協会外から小説家と歌人の方をお呼びして、そのお二人と私たちの間でも、意見の合致を見たという議論の過程も大事にしたいと思います。どうでしょうか。

松本：諮ってええんじゃない。

田中：じゃあすみません、「独白」は最終的にほとんどの人が高い評価をしていること、選ばなかった私も皆さんに説得されましたし、瀬間委員も合議で決めるのが望ましいというご意見をお持ちであるということで、「独白」を兜太現代俳句新人賞としてよろしい方は、挙手をお願いいたします。

(挙手7名)

宮崎：俺だけ？

田中：ダメ？

宮崎：結局、「独白」、「それはともかく寝ます」、「雑に折る」の三編にかなり点が集まりましたよね。この時点でもう「独白」に決めてしまうというのは、どうなんでしょうか。それはそれでいいのかなとも思うんですけど、どうでしょうかね……。

「それはともかく寝ます」を五名の方が選んでますからね。どうですか。すみませんね、私だけが一人邪魔しちゃって。

中内：いや、すごく大事な意見だと思います。でも、よく句会でもあるじゃないですか、「え、この句がこんなに点を取るとは思わなかった」みたいな。

宮崎：ああ、あるね。

中内：7句選で、3番目か4番目、下手したら自分しか取らないかなと思ったんだけど、けっこう平均の評価を得たみたいなことがあって。僕はこの「それはともかく寝ます」は、おそらく予選で、6人が6人とも取りますが、各自の一番押しで予選通過しているのではないだろうかと、作者には申し訳ないけれど思いました。私も好きだから取ってはいるんですが。

宮崎：それはそうだよな。

松本：「独白」と「雑に折る」と「それはともかく寝ます」と「似姿」で決戦投票してはつきりするんやったら、そうした方がええんやないん。

宮崎：どうかな・・・。

松本：そしたら、例えば二つ賞にするとかいう手もあるのかもわからんけど。

宮崎：でも、8人中7人が「独白」を押しわけだから、それはやったとしても「独白」が一番ですよな。もちろん。

松本：今のでもう決まったわけよ、多数決やから。

田中：多数決というのは若干語弊があります

が、仮に投票したとしても、受賞作は「独白」になるということですね。

宮崎：じゃあもう一回やりましょう、挙手を。

田中：では「独白」が第37回兜太現代俳句新人賞で、賛成だという方は挙手をよろしくお願いします。

(挙手8名)

宮崎：全員入りましたね。

田中：全会一致で、「独白」に決定いたしました。今回、新しい試みで、賛成にせよ反対にせよ、いろいろな議論を重ねながらも、最後は全員一致で賞が決められたということは、この新人賞にとって、とてもよい結果となったと思います。また、惜しくも受賞を逃した作品にも、素晴らしい作品がいっぱいあったと思います。ぜひとも、来年度以降もこの賞にチャレンジしていただきたいと思います。皆さん、長時間にわたる審査、本当にありがとうございました。

(拍手)